

シンポジウム報告

スポーツ史学会第25回大会シンポジウム再録

スポーツメディア史を考える

—— 現代、日本近代、欧米近代の視点から ——

The Report of the Symposium in the 25th Annual Meeting
of the Japan Society of Sport History**The Reflection of the History of MediaSport**

— From the Perspective of Present, Japanese Modern and Western Modern —

松浪 稔(東海大学)

中房 敏朗(大阪体育大学)

玉置 通夫(甲南女子大学)

森田 浩之(ジャーナリスト)

はじめに

本稿は、2011年11月12日(土)に東海大学湘南キャンパス17号館ネクスホールで開催されたスポーツ史学会第25回大会シンポジウムの記録である。シンポジストに森田浩之氏、玉置通夫氏、中房敏朗氏を迎え、松浪稔が司会を担当した。

シンポジウムの趣旨

松浪：こんにちは。

昨日は、現在のメディアの状況をあらわしているような、大変興味深い日でした。

読売巨人軍の清武球団代表が、文部科学省で記者会見をするという話がいきなり出てきました¹⁾。なおかつそれがインターネットのニコニコ動画でのみ配信ということでした。読売新聞グループを親会社にもつ巨人の球団代表が会見する。しかしテレビでは放送されず、ネットでしかみることができない。そういうことがありました。

本学、東海大学は、先日のドラフト会議で、

巨人の原監督²⁾の甥っ子の菅野投手(東海大野球部)が巨人から指名されたのですが、日本ハムが交渉権を獲得するということがありました³⁾。だから「一体何事か!」ということで私も情報収集に躍起になりました。しかし、まわりの誰もニコニコ動画に入ることができず、さらにインターネットの2ちゃんねるでも実況されておらず、結局何が起こったのかりアルタイムでは全然わかりませんでした。

インターネット社会になり、あらゆる情報が瞬時に収集できるようになったと思われがちですが、実はそうでもない、ということを実感しました。それが昨日の夕方のことです。

そして仕事を終えて家に帰ると、テレビの8チャンネルでは日本代表のサッカー⁴⁾の放送があり、バレーボール⁵⁾があり、フジテレビは夕刻のゴールデンタイムに4時間以上スポーツの中継をしていたのです。テレビでもインターネットでもスポーツは重要なコンテンツのようです。

本シンポジウムは「スポーツメディア史を考え

る」というテーマです。スポーツ、とくに近代スポーツの発展を考える上で、メディアの役割というのは大変大きかったし、現在もスポーツとメディアの関係、共生関係というのはますます強くなっているといえるでしょう。それだけメディア上にスポーツがあふれているというのが現状です。

スポーツ史が、ただたんにスポーツの歴史を振り返るのではなく、スポーツ文化の現在を考える一つのきっかけを提供する学問であり続けるならば、このような現状をふまえたうえで、スポーツとメディアの関係史を繙くことは大変重要なことではないでしょうか。これがこのシンポジウムのテーマを設定した趣旨です。

まずメディアとは何かということを、簡単に辞書的に確認してみます。辞書によると、情報の伝達手段だとか媒介物、媒体手段、絵の具を解く溶剤、標本の培養器、培養液、それから巫女、霊媒、中間。さまざまな意味がありますが、現在、メディアといわれるのは、新聞、テレビ、ラジオ、そしてインターネットも含めた情報伝達手段でしょう。メディア、またはマスメディアといわれているかと思えます。

メディアという言葉の本来の意味から考えると、情報とヒトの間に立つもの、媒介するものというのがメディアであると考えて差し支えないでしょう。このメディアという言葉が人口に膾炙するのは、ここ20年くらいではないでしょうか。それ以前、1990年代まではマスコミュニケーション、マスコミという言葉が使われていました。

マスコミュニケーションからマスメディアへ、なぜ言葉が変わったのかを考えてみると、インターネットの出現が大きな影響を及ぼしているのではないかと思います。つまり、新聞、テレビ、ラジオのような一方通行の情報伝達から、インターネットを介した双方向の情報伝達手段に変わってきた。情報伝達のやり方が変わった、ということが、言葉の変化につながっているのではないかと思います。よって、ふた昔ほど前に使われていたマスコミとは違った意味で、マスメディア

という言葉が使われているのではないでしょう

シンポジスト紹介

松浪：今回のシンポジウムはサブタイトルを「現代、日本近代、欧米近代の視点から」とし、三つの視点を確立させていただきました。

簡単にシンポジストの先生を紹介させていただきます。

まず欧米近代の視点からということで、仙台大学（当時）の中房先生にお越しいただいています。中房先生は欧米におけるスポーツ新聞や雑誌の研究をされていて、この視点から欧米のスポーツメディア史を概観していただきたいと思っています。

つぎに、日本近代の視点からということで甲南女子大学の玉置先生にお願いしています。玉置先生は毎日新聞大阪本社の元編集委員で、ソウルオリンピックなどにも特派員として参加されました。スポーツの現場に携われていた元記者です。『甲子園球場物語』⁶⁾という本も出されています。元記者である玉置先生から、日本近代のスポーツとメディアの関係について概観していただきたいと思っています。

それから、ジャーナリストの森田浩之さんにお越しいただいております。森田さんは元NHKの記者で、その後『ニューズウィーク日本版』の副編集長を経て、現在はフリーランスで活躍されております。『スポーツニュースは怖い』⁷⁾『メディアスポーツ解体』⁸⁾等の、現在のスポーツとメディアのあり方についての著作を著されています。

今日は、このお三方から約30分ずつ本日のテーマに沿ったお話をいただきます。三つの視点からですが、そこから議論を始めてみたいと思います。そののち、フロアの皆さんとともにスポーツとメディアについて議論ができればと考えています。

さらに、3月に地震がありました。それから福島原子力発電所の事故もありました。こういっ

た大きな出来事をうけ、いま、我々の社会が大きな変革を迫られている状況にあるといっても間違いではないでしょう。そしてスポーツ、メディアのあり方、もちろん我々の生活も、3・11以後、大きく変わらざるを得ない、変わる必要があるのではないかと思います。そこで、時間の許す限り3・11以後のスポーツのあり方、メディアのあり方、それから3・11以後のメディアとスポーツの関係ということまで議論を進めることができばと思っています。

ちょっと冗長になりましたけれども、シンポジウムの趣旨についてご説明させていただきました。

では、まずは中房先生、つぎに玉置先生、それから森田先生の順番でお話をいただきたいと思えます。

中房先生よろしくお願ひいたします。

欧米のスポーツとメディアの研究

中房：仙台大学の中房です。対象の古い順にやりなさいということで、トップバッターを務めます。よろしくお願ひします。

今回の依頼を受けたのは昨年（2010年）でした。これがもし地震の後だったら、断っていただろうと思います。私も被災はしましたけれども身の安全は確保されていまして、数ヶ月間は地震の影響はあまりないと楽観していました。しかし振り返ってみますと、なかなかじっくりとものごとを考える心理的・物理的なゆとりがなく、大学の授業もずっと遅れて遅れてという状況で、所定のスケジュールをこなすだけで精いっぱいでした。そういう話に引きつけた話もしてみたいと思いつつも、ここは「スポーツ（メディア史）を考える」ということですので、依頼された「欧米近代」の立場からお話をさせていただきます。とはいえ、私はこれまでイギリスを中心にやっており、他国についてはあまり詳しくはありませんから、さらっとフォローするくらいになることをお断りします。

私は以前に、スポーツメディアの歴史に関して

二つほど拙い文章を書いたことがあります⁹⁾。その際、思ったことは、いくら調べても驚くような新事実の発見のようなものがない。あるいはメディアを根本的に相対化するような視点とか、目から鱗が落ちるような認識論的転換みたいなものに辿り着いたとか、そういうことが全くない。やりながら、あまり面白くない。そう思いながらやっていました。今回も、当時のものを振り返りながらいろいろやっているわけですが、常識的な考えを根本的に覆すような試みは、ほとんどできません。どうしてなのか。それができない理由というのは、そもそも何なのか。そんなことをずっと考えながら、結局、答えが出ないままここに来ました。したがって、ここでは従来の学問的な研究に変更を迫るような特別な何かが出てくるということはまずありませんので、ご勘弁願ひします。

それでは本題に入ります。D・ベックとL・ポシャートという人が書いた論文があります¹⁰⁾。二人がスポーツとメディアに関して、ドイツ語文献も含めて欧米の研究についてかなり網羅的にレビューしています。2003年ですから、それから8年経っていますので、状況は少し変わってはいるかもしれませんが（とくにインターネットの役割については）。彼らはここでスポーツに関する活字メディアについて、三つに分類しています。一番目が一般紙におけるスポーツ欄、二番目がスポーツを専門に扱う新聞や雑誌、三番目は各種競技団体が発行する定期刊行物。この三つです。おそらく日本で一番関心が高い、他の欧米などの研究でも比較的関心が高いのは、たぶん二番目に相当するところ。これについては、比較的研究状況が豊かなのではないかと考えられます。その二番目を研究する前史のような扱いで一番目についても論及される。三番目についてはおそらく本格的な研究がされてないように考えられます。あるとすれば体育関係団体の発行する雑誌などで、体育史研究の観点から教育としての「体育」についてはある程度研究があるのかもしれませんが。

活字メディアに登場するスポーツ

中房：古い時代から簡単なおさらいです。まず一般紙におけるスポーツ欄です。18世紀頃から一般紙でもスポーツの話題が少しずつ取り上げられます。これはスポーツの話題だから取り上げられたというよりも、地方の出来事を紹介できる題材の一つとしてスポーツが取り上げられた。イギリスの『スペクテイター』という雑誌では、地方の祭りで行われたフットボールやカジェル（棒試合）が描写されたり（1711年）¹¹⁾、アメリカの『ポストン・ガゼット』では地方のボクシングの話題が取り上げられたり（1733年）¹²⁾、イギリスの『タイムズ』ではクリケット・グラウンドの確保の話題が紹介されます（1785年）¹³⁾。このようにスポーツはローカルな話題を提供する一つの題材として取り上げられることが多かったようです。

19世紀の初頭になると、今度はスポーツ欄というものが徐々に独立してきます。『モーニング・ヘラルド』という新聞では1817年に初めてスポーツ欄が登場します¹⁴⁾。アメリカでは『アメリカン・ファーマー』という農業関係者のための新聞だと思のですが、1819年にスポーツ欄が独立します¹⁵⁾。『バルズ・ライフ』は1824年¹⁶⁾、あるいはクォリティー・ペーパーである『タイムズ』でも1829年に初めてスポーツ欄が登場します¹⁷⁾。この段階になりますと、地方を紹介するためではなくて、スポーツは「スポーツ独自に読み解かれるもの」として報道されるようになってきたと言っているのではないかと思います。

つぎに19世紀の後半です。従来の「ローカル・イシュー」としてのスポーツから、「ナショナル・イシュー」としてのスポーツへ、と人々の関心の文脈が変化する傾向が読み取れるのではないかと思います¹⁸⁾。アメリカでは野球、フットボールあるいはボクシング。イギリスではボクシング、クリケット、フットボール。ヨーロッパ大陸の方ではフットボール、自転車などが実際に栄えてくる。そうしたスポーツの国民的関心の高まりを反映して、スポーツの記事が増えてきます。国民的関心とはいえ、当時はまだ中流階級や労働者

階級の成人男性が中心ですけれども、成人男性を中心とする国民的関心の高まりを反映して、一般紙、とくに日曜新聞において熱心にスポーツが報じられるようになります（日曜日は聖日でスポーツ活動は認められず、土曜日の午後に試合が行われることが多かったため）。ちなみに1914年には、『タイムズ』の新聞社にもスポーツ専門の編集者が置かれるようになります。

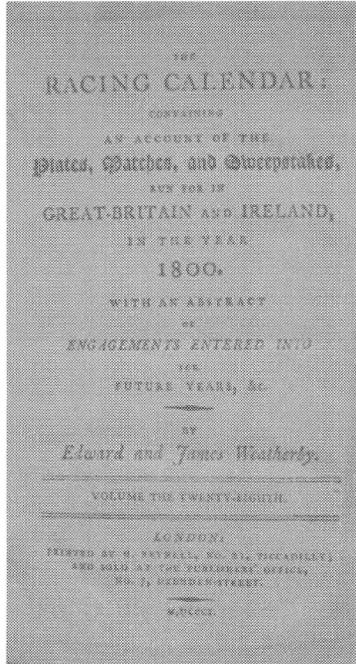
つぎにスポーツを専門に扱う新聞・雑誌。ここで新聞・雑誌と一緒にして分けていないのは、きれいに区分できないからです。新聞のような体裁であるにもかかわらず、名称にマガジンと名乗っていたり、反対に、雑誌のように刊行サイクルは長いのにニュースと称していたりというケースもあります。さらに、当初は新聞として刊行されたにもかかわらず、途中から雑誌に変更する例もあります。新聞と雑誌のボーダーラインがなかなかきれいに引けないために、今回は新聞と雑誌を一緒にまとめて扱っています。

まず、スポーツ専門の雑誌の前史として扱われるのがブロードサイドです（図1）。こういう類いのものが社会の中でけっこう流通していた。これらは客観的事実というよりも講談風の読みもの、エンターテインメントとして消費される傾向がありました。したがって中身がどこまで事実でどこから脚色なのかよく分からない。それでも面白おかしければいいみたいな。そんな報道というか、情報消費のされ方が多いようでした。18世紀後半になってきますと、「レーシング・カレンダー」というものが出てきます（図2）。これは、1752年にジョッキークラブが会員向けに競馬の開催予定やルールを知らせたものがルーツです。こういうものがジェントルマンたちの間で流通するようになります。

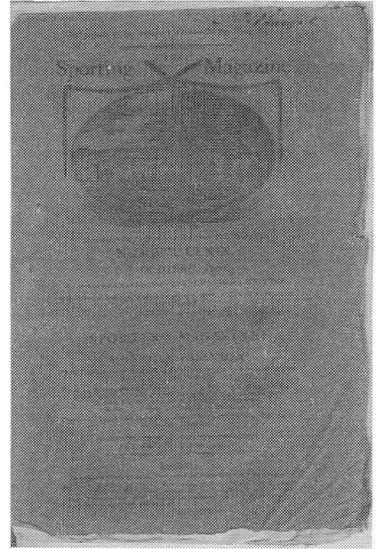
つぎに『スポーティング・マガジン』。これは有名な雑誌ですが、1792年に創刊されます。世界最初のスポーツ雑誌だといわれていますが、これについて綿密に調べたのですが、詳細が不明です。先行研究をみても『スポーティング・マガジン』に焦点を当てた論文が見つからないので



▲ 図1 T.スプリングとJ.ランガンの試合を伝えるブロードサイド (1824年)



▶ 図2 レーシングカレンダー (1800年)



▲ 図3 『スポーツティング・マガジン』 (1806年10月号)

よく分からない。ともかくこういうものが1792年、18世紀末に突然出されました。実物を京都大学の川島昭夫先生から「表紙がついているから珍しいぞ」ということで頂きました (図3)。日本国内で『スポーツティング・マガジン』の表紙がついたものはたぶん他に実在しないように思います。

視野を広げますと、19世紀の始めにはフランスでも同様の雑誌が刊行されます。『ジュルナル・ドゥ・アラ』ですね (図4)。1828年の創刊です。やはり同じような表紙と体裁で、中身も競馬を中心とした雑誌です。表紙を見つけられなかったのですが、アメリカでも『アメリカン・タフ・レジスター』という同様の雑誌が1829年に出されて、競馬中心に編集されます。1831年創刊の『スピリット・タイムズ』ですが、これも競馬中心で、アメリカ、ニューヨークで刊行されます。

かつては競馬中心、狩猟中心の記事だったものから、徐々に『ライフ・イン・ロンドン』(1822年創刊：ロンドン)とか、『フィールド』(1853年創刊：ロンドン)とか、『スポーツティング・ニュース』(1886年創刊：ニューヨーク)。こういう週刊新聞から、近代スポーツといわれるもの (とくに

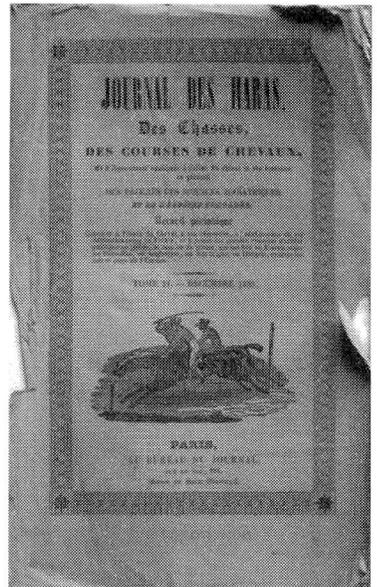


図4 『ジュルナル・ドゥ・アラ』 (1839年1月号)

クリケットやフットボール、野球など) が取り上げられるようになります。さらに1880年頃には陸上競技などのアスレティック・スポーツも積極的に取り上げられるようになります。

イギリスにはなくてアメリカにあるのが、

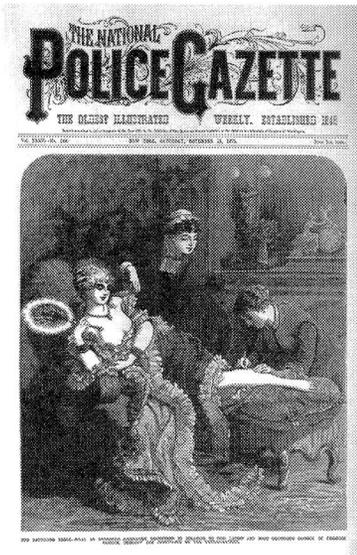


図5 『ナショナル・ポリス・ガゼット』(1879年11月)

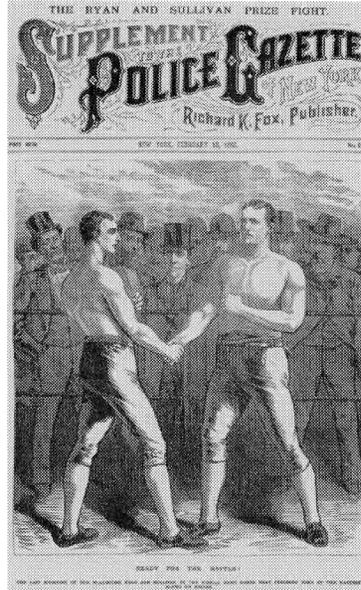


図6 『ナショナル・ポリス・ガゼット』(1882年2月)



図7 『ナショナル・ポリス・ガゼット』(1919年10月)

これです。『ナショナル・ポリス・ガゼット』(1845年創刊)という、19世紀のアメリカで一番売れたスポーツ関係の雑誌だといわれるもの(図5~7)。最初は「ポリス」というだけあって、犯罪とか、何か得体の知れないようなものを扱っていたのですが、少しずつスポーツも取り上げるようになり、読者(といっても男性労働者ですが)を非常に増やしていくんですね。これが今の日本のスポーツ新聞につながるところで、やはり性的なものが出てきます。こうした性的な記事、スポーツ、犯罪がワンセットになったものが、多数の読者を獲得する。イギリスではあまりこういうものは見かけませんが¹⁹⁾、アメリカでは早くから出てきます。

メディアはスポーツに何を行うか

中房: 先行研究では小田切先生がアメリカについて、1829年から15年ごとの単位で、なにをテーマにした雑誌が刊行されているかというのをまとめておられます²⁰⁾。

今回、イギリス、アメリカなどで発行された新聞・雑誌のなかで、創刊年がわかる新聞だけ

を抽出して(わからないものは省きました)、試しにグラフにしてみました(図8)²¹⁾。1790年代は1件、1800年代は0件、1810年代は何件と、10年毎の創刊点数を折れ線グラフにしました。すると19世紀後半でひとつのピークを迎える。20世紀初頭で落ち込んで、やはり戦後ですね、第二次世界大戦後から刊行年のわからないものがおそらくここに(1970年代以降)多数あると推定されますが、ここで(1960・70年代以降)ざあっと増えるという状況です。これだけを見ると、イギリス、アメリカ、フランスなどの創刊点数のトレンドが奇妙にもおおむね一致しているということがわかります。もう一つ私自身が気になったのが、1840年代がゼロという点ですね。ヨーロッパの全般的危機といわれている時期ですけれども、こういうトレンドを一つ見つけたことが発見といえれば発見でした。

結局「何が問題か」というと、要するにシンポジウムのテーマ「スポーツメディア史を考える」というところに逢着すると思いますが、いろいろな見方ができると思います。まずスポーツとメディアの「共生関係」ですね。もしくは「共犯関

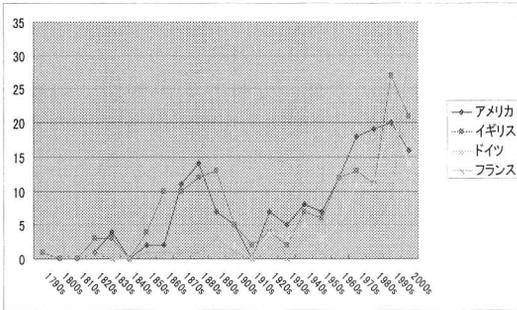


図8 10年毎のスポーツ新聞・雑誌の創刊点数

Information: result and state
 Entertainment: escape reality
 Social Integration: create a communal focus that binds society
 Social Change: create, change and promote the popularity of certain sports (or certain values !)
 (Matthew A. Masucci, Sport and the Mass Media: Impact and Issues)

図9 スポーツ・メディアの役割 (Matthew A. Masucci)

係」と言ってもいいかもしれませんが。ちょっと発音の仕方がわからないんですが、マスッチですかね²²⁾、この人が整理した一覧を紹介したいと思います(図9)。スポーツメディアの役割です。第一にメディアはスポーツをインフォメーションします。「結果」とか「状況」をインフォメーションする。第二にエンターテインメントを提供するという例です。それは現実からの避難場所かもしれません。実社会から一時目を逸らせて、スポーツという娯楽に関心を向かわせている。第三にソーシャル・インテグレーションです。社会の統合につながるような焦点を創造するんだということです。第四にソーシャル・チェンジ。メディアはある特定のスポーツの人気を左右し、それを創造したり、チェンジしたり、プロモートしたりする。こうしたことを指摘しています。さらにここ(括弧の中の「certain values !」)は、私が付け加えたんですけども、特定の「スポーツの人気」のみならず、ある特定のバイアスのかかった「偏

値観」をもメディアが操作しているということが言えるのではないかと思います。

さらにスポーツとメディアの関係という点で、加えたいと思います²³⁾。よく言われることですが、メディアはスポーツに対して何を行うか。第一にスポーツの宣伝・周知です。第二にスポーツの支援・後援。実際、メディアがスポーツを後援したり、支援したりプロモートする例は、よくご存知だと思います。第三に特定のスポーツを「国技」化します。とくにこれは19世紀の話ですが、イギリスではクリケット、アメリカでは野球をナショナルパスタタイムとして、国民的な熱気を生み出すのに貢献する。それから第四にメディアはスポーツヒーローを生み出します。第五に、ここは私が強調したいところですが、スポーツ行事(試合)のサイクルを短期化します。どういうことかという、かつての伝統的なスポーツ、とくに18世紀の農村的なスポーツというものは概ね一年に一回のサイクルで行われていた。ところが近代に入ってくると、そのサイクルがどんどん短くなる。そこにメディアが非常に強力な援軍として登場してきたわけです。毎週、週に一度決まった曜日に新聞が届けられる。あわせて試合の結果もご丁寧に示される。われわれが今まさに馴染んでいる週単位のサイクル、生活スタイルというのが構築される過程に、うまくスポーツも組み込まれていく。そうしたスポーツ行事のサイクルの短期化を演出することに対して、新聞や雑誌などの新しいメディアがとても重要な役割を担ったのではないかとこのように考えています。

さらに、抄録集に書いたように、FA、つまりフットボール協会の誕生の際、フットボール関係者を結びつけたのは明らかにメディアであった²⁴⁾。いわゆる統一ルールの形成過程の中でも、どんなルールが理想かについて、メディアが強い影響力を持っていたように見えます。これはフットボールだけではなくて、クロッケー、テニス、バドミントンでも同様です。当時の新聞をみると、何種類ものルールが掲載されています。後代のわれわれが研究者として、当時のルールがどう

いうものであったか、他にどんなルールがバリエーションとして並存していたのかを、なぜ当時の新聞を使って確認できるのかという、当時のメディアにそういうものが惜しみなく掲示されていたからです。さらに、新聞社（編集者）がルールの是非や競技のあり方にまでコミットする姿勢までも示していたからこそ、われわれは研究者として紙面を使ってルールの形成史をある程度分析することができるわけです。そういう状況が、日本にはない特殊な状況ではないかと思われま

「ソーシャルな領域」の誕生とメディア

中房：最後に一つの理論モデルです。これは宮城体育学会で発表したものをベースにしています²⁵⁾。図をご覧ください（図10）。古代社会というのは、大雑把に言って、「ポリス」(police)の領域と「オイコス」(oikos：英語のエコノミーの語源に当たる)の領域の二つがある。右上の楕円形がポリスで、左下の楕円形がオイコスになります。オイコスの領域では生命維持のための活動をやっている。それは家事と経済（労働）です。これらは、たんなる生命維持のための活動（他に付加価値がない、創造的価値のない活動）であると考えられ、非常に貶められていたわけです。ところがポリスの領域では、政治や言論を中心にやっていました。加えて、学問・芸術・音楽・詩・スポーツなどの（現在でいう）「余暇活動」もありますが、これらの活動はすべて上流の自由市民の

男性だけの独占物でした。この人たちはまた戦士ですね。古代社会というのは、こういうふうの上流階級の男性の空間、女性たちの空間、労働者（奴隷）の空間、こういうふう大きく分けられていたと考えられます。これが一つの理論モデルです。

つぎに古代から一気に近代に移ります（図11）。図の上の方はおいといて、下のほうのオイコスの領域が、家事と経済の二つに分かれます。その原因は、簡単にいえば「職住分離」です。工業化に伴う職住分離の結果、「家事をする場所」と「働く場所」がきれいに分かれます。それはまた、それまでオイコスの領域として一体であったところから、エコノミー (economy) が独立してくるという過程を伴います。同時にまた、価値観の転換も生じます。かつては貶められていたエコノミーが、こんどは非常に価値あるものとして崇められます。労働とは本来、価値あるものである。「職業神授説」(カルヴァン)、すべての職業は天職であり、営利活動は肯定できるという考え方さえも聖職者から出てくるわけです。こうして営利活動（とりわけ生産活動）が非常に価値あるものとして、同時にそれは男性の領域として（一方で女性を遠ざけながら）価値あるものとして再構成されてきます。こういう過程で近代の「性別分業体制」が確立してくるという一つのモデルです²⁶⁾。

近代社会においては政治の世界、経済の世界と

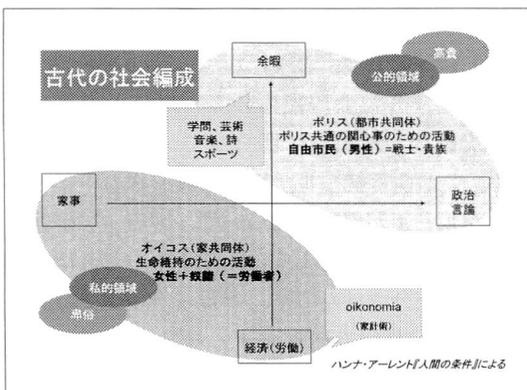


図10 古代社会の公私の社会編成

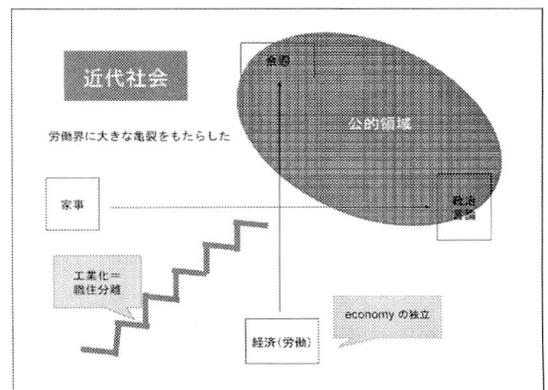


図11 近代社会の公私の社会編成①

いうのは「公的領域」を構成し、なおかつ「公的領域」は「男性の領域」として構成される。それに対して、余暇の領域、家事の領域というのは「プライベートな領域」として構成されます。余暇は男性にも女性にも分配されて、余暇の地位が古代社会と比べて総じて低下します。そして家事や育児のほうは、一方的に女性だけが担う領域として再度、固定化されます。こうして「パブリックな領域」と「プライベートな領域」が、近代に入って新しく編成され直されます（図12）。古代社会とは違って、近代社会では図の左上の楕円形が「私的領域」、図の右下の楕円形が「公的領域」を構成するようになります。これがいわゆるマルクス主義フェミニズムが唱える社会モデルの大雑把な概要です。

さらにここにハンナ・アレントの見立てを重ねてみたいと思います（図13）。アレントによれば、近代になると、古代以来続いていた「公的領域」と「私的領域」がだんだん崩れて「ソーシャルな領域」が新しく生まれてくると主張します²⁷⁾。図の濃い色の楕円は、「政治」「経済」、そして一部の「余暇」を含む領域を「ソーシャルな領域」と、私が恣意的に書き加えたものです。そのソーシャルな領域に立脚して、マスメディアというのが登場してきたのではないかと、ここでは提案してみたいと思います。極論すれば、社会がなければメディアは機能しない。社会があるからこそ、メディアというのはうまく機能できる。立

ち上がる。効果をもつ。そう言えるのではないか。なおかつ「みるスポーツ」というのも、社会的な領域に立脚しながら、「観衆」という不特定多数の社会集団がうまい具合に形成されてくるといえるのではないか。

女性スポーツの変遷

中房：これは19世紀後半の女性スポーツの変遷です（図14）。60年代にはクロケー、70年代にはスケート、80年代にはテニス、90年代にはゴルフが流行したことを描いています。このように19世紀から女性たちもスポーツに積極的に参加していたことがわかります。しかしこれはあくまでも「余暇活動」にすぎません。

私は女性スポーツの普及は三段階に分けられると考えています。第一段階は余暇活動として参加、第二段階はオフィシャル・プレーヤーとして参加、第三段階は意志決定者として参加。こういう段階で女性はスポーツに参加していく。これを先ほどのモデルにあてはめると、最初は、女性は図15のように、左側の長方形の囲み、「余暇活動」として参加します。つぎに図の真ん中、「競技者」、オフィシャル・ゲームのプレーヤーとして参加します。もう少し後になると、図の下の囲み、「プロの競技者」なんですけども、経済の領域ですね、こちらに参入します。最後にこちら、右側の囲みは「競技団体役員」で、「政治」の領域になります。左側のほうはだいたい女性の

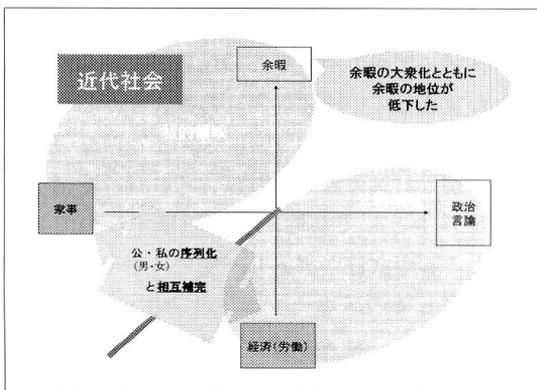


図12 近代社会の公私の社会編成②

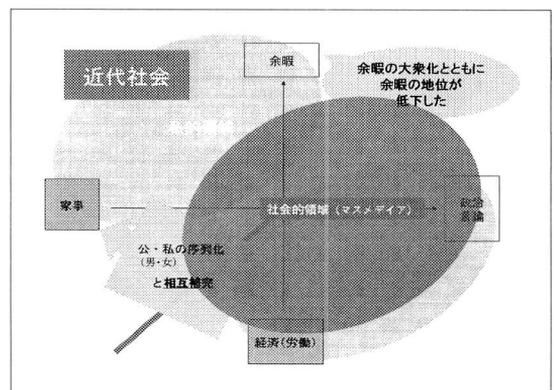


図13 近代社会の公私の社会編成②

領域、右側のほうは男性の領域ですね。つまり、もう少し具体的に説明しますと、家事と政治を結ぶ横軸の線上を、左から右にいくほど男性の支配が強くなる、そして余暇と経済を結ぶ縦軸の線上を、上から下へいくほど男性の支配が強くなります。男性の支配が強い領域が、近代社会における「公的領域」ですね。

近代産業社会の構造とスポーツ、メディアの構造
中房：メディア、草創期の新聞の紙面をみますと、とくに18世紀の新聞をみると、ほとんどが政治と経済の記事で埋め尽くされています。そこから19世紀になって、少しずつ「社会面」（市民の

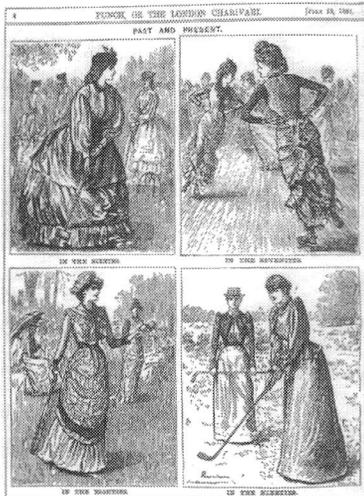


図14 19世紀後半の女性スポーツの変遷（『パンチ』1891年7月18日）

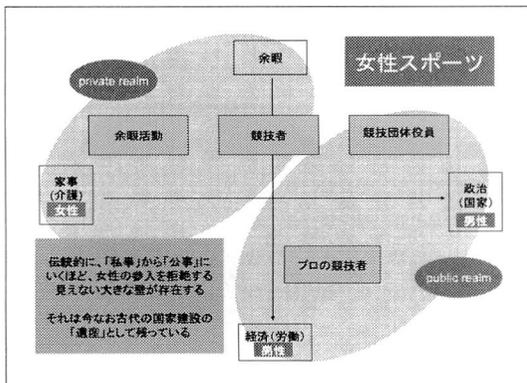


図15 近代社会における女性スポーツの位置づけ

犯罪など）が増えます。その歩調と合わせるようにスポーツの記事も増えてくる。その理由は、アレントの見立てを借りれば、社会的領域が生まれて、社会的出来事が人々の大きな関心事になったからである。そしてスポーツもまた新しく誕生した「社会的領域」とうまく関係を築きながら、人々の共通の関心事（社会的関心事）になったからである、という見方ができるように思います。

20世紀に入ると、とくに1960年代以降、女性のスポーツがどんどん盛んになる。でも競技団体（A・グットマンのいう「官僚組織」）は男だらけ。今でもそうです。それはつまり、競技団体は「ポリス（政治）の空間」だからであり、その空間は古代社会より男性が占有し、男が統治能力を存分に発揮しうる「言論の闘技場」だからである、と説明できるのではないか。さらに生涯スポーツ、あるいは余暇活動ですね。余暇活動（私的活動）としてのスポーツの地位が、競技スポーツよりも低いと観念されているのはなぜか。それも同様に説明できるように思われます。それは「公私」、とりわけ近代の「公私の価値の序列化」に由来する。つまり生涯スポーツは「私事」、プライベートの活動である。それに対して官僚的な公認団体の管理下で行われるスポーツは「公事」、パブリックな活動である。そうすると、近代の公私の序列に従えば、必然的に生涯スポーツの地位が、公事である競技スポーツよりも低く見積られる、と説明できます。

こうした構造、近代産業社会の根本的構造にこそマスメディアが立脚しているように思えます。マスメディアがカバーする領域は社会的領域とおおむね重なっています。ところが、かかる領域には「家事」や「余暇」の出来事は入らない。メディアがカバーするとすれば、それは「生活面」として、主として女性記者が執筆するのでしょう。ところが女性が参入しやすいスポーツは「余暇活動としてのスポーツ（生涯スポーツ）」である。それなのにマスメディアは、政治や経済を含む社会的領域からはみ出すものは報じたがらない。だから「スポーツする女性」は必然的にマス

メディアから消えてしまう。それに対して、マスメディアが好んで報じたがる競技スポーツや商業スポーツは、そもそも女性が参入しにくい領域である。余暇空間にはスポーツする女性も大勢いるにもかかわらず、マスメディアの報じるスポーツの世界には女性は少数で、男性ばかりがあふれてしまうという根本的な構造が、こうして巧妙に仕立て上げられてしまっているのではないか。

しばしば「スポーツとメディアは仲がいい」といわれますが、これも同様に、スポーツもメディアも根本的に同じ土俵の上に立脚しているからこそ、必然的に仲がいい状態が生まれてくるのではないか、というのが私の暫定的な答えです。

松浪：ありがとうございます。もっとゆっくりじっくりと聞きたかったのですが、時間の制限をこちらで作ってしまい、中房先生や皆さんに申し訳ないことをしたと思います。

18世紀後半から19世紀にかけての欧米のスポーツ報道の状況、それから「ローカル・イシュー」の報道から「ナショナル・イシュー」の報道へ、私的な領域から公的な領域への報道の移動。そこから作り出される社会的な領域におけるマスメディアの報道などについてお話しいただきました。のちほどまた、中房先生とお話をしながら確認していきたいと思います。

それでは続いて、玉置先生に、日本近代の視点から、お話をいただきたいと思います。

日本の新聞(活字メディア)とスポーツ

玉置：玉置です。よろしくお願ひします。

日本に近代的なメディアができたのは幕末から明治にかけてですが、いわゆる最初のメディアは、活字メディアである新聞でした。新聞の定義は、定期的に発行されるものをもって新聞とする訳ですけども、毎日今のように発行される新聞というのは、明治3(1870)年の『横浜毎日新聞』から始まります。それでいち早く、社会の混乱期ですからいろんなことを伝えていくわけです。西洋から入ってくる風俗なり何なり、文化というも

のが紹介されていきます。そのなかでスポーツというものもメディアによって紹介されていきます。スポーツが日本に入ってきて普及する一つの大きな要因は、教育。学校での教育で行われたということと、もう一つはメディア、やはり新聞だと思います。

初めてスポーツの記事が出たのがいつなのかを調べていきますと、記事としては明治14(1881)年です。初めて明治天皇が島津邸で相撲をみるという催しをやるわけです。いわゆる天覧相撲ですが、その催しを伝えた『東京日日新聞』の記事²⁸⁾がスポーツ記事の最初だといわれています。ただその前にも、スポーツ的なことは出てくるんです。例えば明治12(1879)年に横浜で外人がスポーツ、たぶん野球だと思われるんですが、やる場所が狭いので「玉投げ場狭隘につき広くしてくれとの申し出ある」っていうそんな記事²⁹⁾もあるわけで、これもスポーツの記事だといってしまうと、かなり前からあるということになるんですが、いちおう明治14年のその相撲の記事が本格的なスポーツ記事としては最初となっています。それから明治16(1883)年ぐらいになるとレガッタとかいろんな競技の記事が出てきます。

当時の新聞は大体4ページです。もちろん運動面などはないし、社会面の中にちょこっと載つけるといっていい形ではないわけですが。それでも、明治20年代になってくると第一高等学校だとかの旧制高等学校、それからミッションスクールなどで、外人の宣教師なんかは野球を教えるというところから試合が行われる。そういう記録みたいなものが20年代から出てきます。20年代、30年代になると一高から今度は早稲田、慶応を中心に私学に野球の実力校が移っていく。それをけっこうこまめに記録しているわけです。

『日本』という新聞がありますけども、その中でいうと、正岡子規なんかは日本の野球はいつ渡来したとかについては「私は明治17年だ」というふうに書くと、3日後くらいに「正岡氏のその書いたのは間違いである。私は明治5年に野球をやっていた」なんていう反論が出たりするんです

ね³⁰⁾。当時まだ今みたいにみんなが新聞を読む時代じゃありませんけれども³¹⁾、知識階級の人たちの間ではそういう記事がすぐ話題になったりしました。高等学校でそういうふうになると、その人たちが母校の中等学校へ帰って行って野球を教えるという形で、明治30年代になると全国中等学校に野球部ができてたりして広がっていきます。

ただメディアとしては、当時、新聞か雑誌しかありません。スポーツ雑誌も明治30年代にできますけれども、それらは割合公平に、あった出来事を伝えているわけです。サッカーも野球も何もかも。どれをすごく奨励しようとか、どれを強くみんなに知らせようって事はないんですけども、自然とやっぱり野球の記事が多くなっているのは事実です。

明治30年代後半から40年代にかかるところで日露戦争が起こりますが、この戦争が、新聞が国民の間に広く伝わる、全国紙になる一つのきっかけになったと言われています。結果をみんなが知りがって号外を読む、新聞を読むという形ですが、それと共にスポーツというものも単なる結果だけじゃなくて、試合の様相が細かく出るようになります。

明治44(1911)年に「野球害毒論争」³²⁾が起きると、今まで野球を知らなかった人も、「中学校で野球をやるとバカになる」、「いや、そうじゃない」というような論争があるということを知って、記事を読むようになって、「ほんとにそんなものなのか」「害毒なのか」なんていう議論ができてくるわけですね。

メディアがスポーツに参入しはじめる

玉置：大正時代に入るとメディアも、このスポーツというものを、みんなもやっぱり関心を持っている、だからこれを積極的に書いていこう、というだけではなくて、スポーツにそのまま参入してくるわけです。積極的に大会を後援する。その最たるものが大正4(1915)年の今の夏の高校野球の前身となる中等学校野球大会。その前の大正2

(1913)年に、大阪の豊中で行われた全国オリンピック大会というのがあって、これは日本で最初の陸上競技の大会です。それが行われた1ヵ月後に東京でも陸上競技大会が行われます。それが今の陸上の日本選手権になるわけです。その頃からメディアが積極的にスポーツに介入していく。中等学校野球は『朝日』がやったわけですけども、当然ライバル関係にある『毎日』も全国オリンピック大会を始めラグビーやサッカー、いま、年末に大阪で高校ラグビーをやり、東京で高校サッカーやっていますが、大正7(1918)年から始まったものです。大正13(1924)年には『毎日』も中等学校野球に参入する。こういう形でメディアがスポーツを報道するだけではなく、積極的に大会を設営するというので、これで一気に全国に中等学校野球というものが知れ渡り、野球をやっていない人たちも地域で話題になるから知る、という形になっていくわけです。

この活字一辺倒のメディアの中に、初めて活字ではない電波媒体としてのメディアというのが出てくるのが大正14(1925)年です。これがラジオです。ラジオは最初からあまり難しいことは報道しなくてもいい、エンターテイメントでいこう、という基本的な方針があったようです。ですから最初から劇場中継だとか演芸だとか、そういうものを積極的に放送するわけです。昭和2(1927)年には早くも甲子園の夏の中等学校野球を中継する。そうすると意外なほど評判がいい。その前の年に初めて「中継をさせてくれ」と言ったら甲子園球場は断ったわけですね。「内容を知らせると客が来なくなる。だからやらないでくれ」ということです。「いやそんなことはない」といろいろ押し問答をしたけど、結局埒が明かなくて、次の年ももう一回チャレンジして、何とかしぶしぶOKさせた。ところがそれをやってみると、始まったばかりの時期ですからラジオの視聴者が少なかったわけですけども、「すごくよくわかった」「聞こえた」ということですから評判になる。それをみて東京のアナウンサーが、東京に帰って神宮球場で人気のあった六大学野球を中継する。こ

れも人気がある。なら相撲もやろうじゃないかということで、大相撲の中継も入るわけです。この時に初めてメディアがスポーツに介入するというほど大げさではないですけど、介入するわけです。

相撲の中継をやるには条件があります。当時の相撲は仕切りに制限時間がなかった。だからゆっくり見合っていた。中には2時間ぐらい続いたこともあると語り伝えられる取り組みもある³³⁾ぐらい、いつ立つかわからないわけです。「こんなんでは中継ができない。だからなんとか区切ってくれ」ということで妥協の産物として10分間の仕切り制限時間が初めて設けられた³⁴⁾。仕切り時間を制限した方が中継しやすい。そうすると力士も早く立たなくてはいけない、というところから、制限時間の10分より前に立つとか、いろいろなことが出来てきてスピーディーになった。面白い、ラジオを聴いてわかった、というところから相撲人気盛り上がるわけです。こうして新聞だけだったところにラジオが加わってくる。

さらに新聞も、例えば『読売新聞』のように、「これからは職業野球の時代だ」ということで昭和6(1931)年と昭和9(1934)年にアメリカの大リーグを呼んでくる。そうするとまたこれが爆発的な人気になる。当時の『読売新聞』は5万部あるかないかぐらいの東京のローカル紙だったわけですが、これによって爆発的に30万部になったとかいろいろ伝えられていますけども、そういうふうにして一気に読者を増やすという形になったわけです。それでラジオもその職業野球と称したプロ野球を中継する、という形になってスポーツはますますメディアとの密接な関係をつくったと、こういうことだと思います。

残念ながらそこからは戦争状態、戦時体制になりますから、スポーツの大会をやることができませんで、メディアとの関係がなくなってしまうわけです。

戦後、いち早く復活したのがスポーツです。昭和21(1946)年からは六大学野球など戦前からのスポーツ大会は全部復活するわけです。その時に復活の一つの促進剤になったのがやはりラジオで

す。ラジオで「久しぶりに実況中継します」と言って、それをみんな聞いて「そうか、じゃあ球場に行こう」。球場がまた膨れ上がったわけです。活字メディアは、まだまだ用紙も何もない時代ですから、2ページぐらいの新聞を出すのがやっとです。社会面、首を絞めて殺すなんていう記事の横に、川上が本塁打、なんていう記事が載っているような、そういう紙面です。それではあまり詳しいことがわからない。当たり前です。紙面がないから。それで、これだけ球場にいっぱい人が行っているんだから、もっと専門的な、野球をもっと詳しく書いた新聞を出したら売れるのではないか、という発想から昭和21年にスポーツ紙が日本に初めて登場するわけです。今ある『日刊スポーツ』が創刊された。そうすると他の社も同じように「こっちも出そう。こっちも出そう」ということで昭和23(1948)、24年ぐらいにかけて、現在あるスポーツ紙というのが誕生した³⁵⁾、こういう経緯ですね。

テレビの登場

玉置：戦後さらに、スポーツとメディアの関係を強力にするものとしてテレビが昭和28(1953)年に登場する。テレビも高校野球を中継する。プロ野球を中継する。それがものすごく評判になる。まだ誰もがテレビを買えるような時代ではありませんから、街頭テレビというものが出てきました。それで一躍有名になったのが力道山を中心とするプロレスです。スポーツが新しい電波媒体のテレビと密接な関係を持っていく。

この段階では、活字もあって、電波媒体、テレビもラジオもあって、別にトラブルはないわけです。いってみればそれぞれ勝手にやっているという形だったわけですが、この二つの関係に多少変化が出てくるのが東京オリンピックだと思います。

1964年、昭和39年ですが、この時に初めて衛星中継ができるわけです。要するに外国の人が東京オリンピックをはじめて生でみることができた。4年後のメキシコオリンピックは、今度は国内で

日本人たちがメキシコでやっている模様を衛星中継でみる事ができた。それ以後それが当たり前、常態化していくわけです。

もう一つの転機が訪れるのが1984年のロサンゼルスオリンピックです。結局オリンピックそのものも立ち行かなくなってきた、経営ということ、いい言葉で経営です。いわゆる商業化路線が避けて通れなくなる。それでユベロス商法というやつで大赤字が予測されたのが大黒字になる。その時にやはり戦略の中にテレビが入っていくわけです。

次のソウルのオリンピックは、プロが容認されて初めての大会です。テニスには当時のシュテフィ・グラフなんかが出てくるわけです。この大会あたりから新聞とテレビとの間で取材上のいろんなトラブルが起こるようになります。それはなぜかと言いますと、テレビは良い画面、良いものを良い時間帯に放送したい。資本系列的にいうと、強力なスポンサーを持っているアメリカの三大ネットワークが主体になる。そうすると、ソウルとアメリカの時差との関係から、午後の1時頃に100メートルの決勝をやっていたんです。体操なんかの競技は夜中の2時頃終了する。取材していると、なんか放送で一生懸命言っている。「あれは何を言っているんだ」と聞くと「この競技は今、予選の何組をやっているけども、全部終了するのは午前2時を過ぎる。だからお客さん、地下鉄は12時までしかありませんので、そろそろ帰ってください。ずーっといると帰れなくなりますよ」という放送をしているということもありました。本来ではおかしいじゃないかと、午前2時まで競技をやるっていうのは非常識極まりないわけですけども、どうしても日程上の関係で今日中に全部やってしまわないといけな。それでそういう編成になるわけです。そういうふうにして、ルール、日程を変更したり時間を変更したりということが起こっている。それは商業化ということによれば当然のことなのだと思うのですが、そうすると新聞としては非常に困るわけです。時間の締め切りの関係から何から。

それから現場でいろいろトラブルが起こる。優勝した、勝った選手にすぐ話を聞こうと思っても聞けない。ガードされて。テレビでまず取材をする。「おかしいじゃないか」なんていうことで、至る所で血気盛んな記者が出てきて殴り合いを演ずるといようなことが、ソウルあたりからよくみられるようになってしまう。テレビマネーがなければ運営がスムーズにできないんだということになってくると、テレビの意向を聞かなくちゃいけないということになるわけです。新聞側からすると「そんなもん関係ねえぞ」ということで。特に古い昔の、のんきな取材をやっていた先輩達からすると「テレビが悪いんだからな」なんてことになるわけです。新聞には時代と共にスポーツを盛り上げてきたひとつの功績があるのも事実です。いまさら「テレビが悪いからテレビなくせ」なんて言っても時代錯誤ですから、そんなこと言っても始まらない。そこで結局、妥協的にミックスゾーンが出てくるわけです。水泳なんかは見ていてわかるように、北島康介が優勝した。すぐに来て「なんも言えねえ」とかなんか言っていました³⁶⁾。あれホントは一番聞きたいところなんですよね、生でみんなが。ところが、まずテレビで第一声を言う。そうすると「おかしいじゃないか」「けしからんじゃないか」とか新聞記者がいろんな文句を言う。だから、そこを言ってから引き下がるまでのずーっと歩くところは取材しているよということになって、ミックスゾーンという名前が付けられたわけです。

ただ一回言っちゃうと、もう一回言ってよって催促したって、何を言ったかなんて言わないですよ。後の記者会見はもちろんありますけども、ドーピング検査があると5時間6時間経ってからの記者会見になります。それでは感動は薄れてしまいます。だから、結局そこでいつも血気盛んな人といえますか、そういう人が怒ったりなんかして、ちょっとルール違反をしてテレビの取材の中に入ったりして揉め事になるわけです。そういうふうにしてオリンピックも、それまでは、それほど角突き合わせて取材するということがなく

過ごしてきたわけですが、どうしてもオリンピックの運営で、オリンピックそのもの、運営ということが多額のスポンサーを必要とするように肥大化してしまっているわけですから、当然スポンサーのお金がある。そうするとそのなかで一番有力なのはやっぱりテレビであることは間違い無い。

テレビの放映権、放映権料というものは悪い一方ではなくて、もちろんIOCや各国のオリンピック委員会に還元されて、いろんな意味でプラスな面ももちろんあるわけですが、取材ということかというと、そこでかなり制限が設けられて対立を生み出す要素になってしまう。こういうことだと思います。

スポーツジャーナリズムの重要性

玉置：だから、これからどうしたらいいのかということですが、テレビの今のような路線は、もちろんすぐには変えられないと思いますが、スポーツジャーナリズムという観点から見ると、やはり選手の背景、メダルを取ったり、取れなかったり、そこまでの努力、いろんな意味での歩みとかその選手の置かれた立場だとか、いろんなことを伝える必要があるわけです。ただ試合を淡々と中継放送したら良いのではなく、試合の裏側や選手の心の中に迫る姿勢が大切になってきます。そこで私は新聞が、もうちょっとしっかりしなければいけないだろうなあという気がします。いろんな意味での本来のスポーツジャーナリズムというか、日本の選手に偏った報道に終始するのではなく、その選手や競技の背景などを伝えることに秀でているメディアが、まさに新聞だと思います。

それから、オリンピックではいろんな競技をやっているわけですが、日本選手が出てない競技、出ていても弱い競技っていっぱいある。そういうものも本質的に面白いところはやっぱり伝えていかなきゃいけないと思うんです。それをするには非常に覚悟もいるし、努力もいるわけです。今までみたいに「大体年齢が頃合いになっ

たから行って来い」と言われて、「はいはい」と言って、「オリンピック取材に行きました」といった、箔をつけるというような、こういう時代ではもちろんなくなっているわけです。行くには相当の覚悟がいるし、知識がいるし、勉強をしなければならぬということだと思います。そういう、ちょっとテレビとは違う視点の、テレビに映らない部分というものの報道が、これからはかなり必要になってくるんじゃないかな。それがこの長い間の、戦後60年のテレビとの関係から、新たな関係になるのに必要なのではないかなと、私なりに思うことであります。

松浪：ありがとうございます。玉置先生には、わかりやすい具体例も交えながら、ここ130年ぐらいの、日本におけるスポーツとメディアの関係史についてお話をいただきました。それでは最後に森田さんに現代のスポーツとメディアの状況についてお話をいただきます。よろしくお願ひします。

メディアスポーツと物語

森田：森田と申します。

もう今年も11月です。今年2011年は、ものすごい勢いで過ぎたような気がしています。

次々と「出来事」が起こったせいもあるんでしょう。大震災はあるわ、なでしこジャパンは世界一になるわ、ステイブ・ジョブズは死ぬわ……。で、もう11月です。そんなあわただしいペースとともに、僕たちはメディアとつき合っているわけです。メディアは私たちの家庭にも街なかにもほとんどユビキタスにあって、今は多くの人が日常的にメディアを持ち歩いています。そのメディアが伝えてくる「出来事」「物語」から、僕たちは逃げられない状況になっています。

今日は「メディアスポーツと物語」というテーマで話をさせていただきたいと思います。

イントロダクションで「メディアスポーツとは何か」という復習を軽くやってから、まず「オリンピックのことば」を突っついてみたい。オリン

ピックでは、アスリートのインタビューからテレビの実況まで、さまざまな「ことば」が紡がれます。それらがさまざまな「物語」を伝えます。物語というのは、たいてい何らかの価値観を帯びている。イデオロギーといってもいいかもしれません。社会に、コミュニティに、いろんな意味で影響を与えます。そんなメディアを通じた最近の「オリンピックのことば」の意味を考えたい。

二つめに、物語づくりに「協力」するアスリートという話をします。一点目の「オリンピックのことば」にしても、90年代のことばと00年代のことばはだいぶ違っているはずなんです。もしかしたらそれはメディア側だけじゃなくて、メディアに登場するアスリートが意識的かどうかにかかわらず、なんらかの役割を担っていないだろうか。先ほどメディアとスポーツの「共生」あるいは「共犯」というお話がありましたが、メディアにおけるスポーツの物語化にはそのあたりも作用しているのではないかと考えています。

三点目が、ワールドカップ南アフリカ大会の物語です。覚えていらっしゃるかと思いますが、大会前に二つのことがいわれていました。一つは「南アフリカは危ない」。もう一つは「日本代表は弱い」。大会が終わってみたら、どちらもはずれていました。南アフリカでは大会期間中に治安面で大きな問題はなかったですし、日本代表は低い下馬評を覆してベスト16まで進みました。

僕は南アフリカに開幕日から決勝が終わるまで35日間いました。このワールドカップ期間中、日本のテレビ・新聞には触れずに、現地のスタジアムで試合を見ていたわけですね。それから日本に帰ってきて、大会中の新聞を読んだり、録画していたテレビ番組を見たりしたら、どうも僕が現地で経験したワールドカップとは別のものがそこにある気がした。このとき大変な物語の力がはたらいていたと思うんです。そんな話をします。

まずイントロダクションです。「メディアスポーツ」という言葉について、おさらいをさせてください。メディアは先ほどから言われているように、どこにでもあるユビキタスなもの。スポー

ツもたいていの人は、自分でやったり見たりしているもの。こちらもユビキタスです。カルチャーのなかでもパワーがあることはまちがいない。専門の月刊新聞があるのはスポーツだけですから。

その二つのパワフルな存在がタッグを組んだ形が「メディアスポーツ」です。メディアにのって伝えられるスポーツ、スポーツを伝えているメディア、それらをひっくくめて「メディアスポーツ」と呼んでいきます。これは別に僕の造語ではなくて、アカデミックな研究対象になっています。英語圏の研究者は「MediaSport」と一語で書く。それくらい結びつきの強いタッグだということですね。

テレビとスポーツは仲がいい

森田：先ほど二人の先生のお話にも出てきましたが、メディアとスポーツは仲がいいですね。これはもう相思相愛です。メディアがあることで多くのスポーツが僕らのもとに届けられていますし、スポーツがあることでメディアは頼りになるコンテンツを獲得できている。

メディアのなかでも、とくにテレビは本当にスポーツと仲がいい。まず、テレビで見ないとわからないスポーツがたくさんある。たとえば駅伝やマラソンを現場で見ても、レースの全体像はつかみにくいはずですね。スキーのアルペン種目なども同じようにわかりにくい。そういうスポーツはたくさんあります。

テレビとスポーツの仲のよさを示す数字を見てください（図16）。これは日本で視聴率調査が始まって以降の高視聴率番組のベスト10です。1位は【NHK紅白歌合戦】、6位に朝の連続テレビ小説【おしん】が、9位に1965年の誘拐事件報道の【ついに帰らなかった吉展ちゃん】が入っていますが、残りはすべてスポーツ関連です。テレビとスポーツがいかに強力なタッグであるかがわかります。

メディアスポーツが最強のタッグである理由をもうひとつつけ加えると、私たちが「油断」しているときにいろいろなことをしているという点で

■とくにテレビとスポーツは仲がいい

歴代の高世帯視聴率番組トップ10
(視聴世帯数を報告した1982年12月3日から2009年1月30日まで、関東地区)

	番組名	放送日	放送局	世帯視聴率(%)
1	第14回NHK紅白歌合戦	1963/12/31	NHK総合	81.4
2	東京オリンピック (女子バレー、日本メダル獲得)	1964/10/23	NHK総合	66.9
3	2002 FIFAワールドカップ グループリーグ、日本×ロシア	2002/6/9	Fジテレビ	66.1
4	プロレス (WWA 世界選手権 アストロイヤーマケル山)	1963/5/24	日本テレビ	64.0
5	世界バンナム杯タイトルマッチ (ファイティング鳳田×アラン・ジョージ)	1966/5/31	Fジテレビ	63.7
6	おしん	1983/11/12	NHK総合	62.9
7	1998 FIFAワールドカップ グループリーグ、日本×ロシア	1998/6/20	NHK総合	60.9
8	世界バンナム杯タイトルマッチ (ファイティング鳳田×アラン・ジョージ)	1966/11/30	Fジテレビ	60.4
9	ついに帰らなかつた吉屋ちゃん	1985/7/5	NHK総合	59.0
10	ミョンヘンオリンピック	1972/9/7	NHK総合	58.7

ビデオリサーチ・オフィシャルウェブサイトの表をもとに作成

図16

しょう。たとえばテレビのニュース番組であれば、世の中には事件やら事故やら不祥事やらがたくさん起こるので、たいていはそういう話から始まります。しばらくはキャスターやコメンテーターが眉間にしわを寄せるようなトピックが続きます。

でも、たとえば夜10時に始まるニュース番組があったとしたら、10時35分から40分くらいに「CMの後はスポーツです！」という声がかかる。CMが終わって番組に戻ると、どこか様子が違ってきます。軽快なBGMと、動きのあるカメラワークのなか、スポーツ担当のキャスターが登場します。女性であることも多い。60秒前まで眉間にしわを寄せていたスタジオの人たちは、この世の救いを見いだしたかのように笑顔になっています。

ひとことでいえば、スポーツニュースに切り替わるときに、番組の「モード」のようなものも切り替わる。スポーツは楽しいもの、すてきなもの、フレッシュなもの、ポジティブなものとして扱われ、ほかの「油断のならない」世界とは別のところにあるかのように扱われる。

ニュースには二通りあります。一つはふつうのニュース、もう一つはスポーツニュースです。その「スポーツニュース」のモードが、僕らを油断させるんです。

当たり前の話ですが、スポーツ新聞はフレンチ

レストランにはないですよ。あるのは定食屋とかラーメン屋さんです。ラーメンのスープを飛ばしながら読むのがスポーツ新聞です。テレビのスポーツニュースにしても、たいてい夜の11時すぎに始まります。「今日も疲れたな、スポーツニュースでも見るか」というタイミングです。

つまり僕らがスポーツニュースに接するのは、緊張していないとき、あるいは向上心のかけらもないときだということです。けれども、そんな緊張感のないときに接するもののなかにとんでもないものが詰まっているという話が、たぶん先ほどからこの場でされている。

メディアスポーツはまさしく「物語」を語っています。どんな物語か。おなじみだとは思いますが、努力の価値、戦術の大切さ、挫折からの復活劇、一体感や団結の重要性。地元の期待を背負ったり、国の期待を背負ったりもします。そんな物語が、もうあちこちに埋め込まれている。僕らはそんな物語をとくに意識することもなく、日々、空気のように吸い込んでいる。

北京オリンピックの聖火リレー

森田：では、この物語が最近どうなっているかという話に移ります。「オリンピックのことば」という話です。このところのオリンピックのことばに注目すると、物語の伝わり方が以前より込み上げてきたのではないかと感じます。メディアスポーツの側がより「周到」になったという感じがします。

2008年の北京オリンピックをちょっと思い出していただきたいのですが、聖火リレーが大荒れになりました。なぜか。中国政府がチベットを弾圧しました。そして世界各地で中国の人権問題について抗議行動が行われました。すると今度は中国人が聖火リレーの「応援」に駆けつけるようになった。世界中、聖火の行く先々で「フリー・チベット派」と「中国人」の対立が起こるという事態になった。

日本での聖火リレーは長野で行われました。僕、行きました。新幹線が長野に着いたら、もうどこかからシュプレヒコールのような声が聞こえ

てくる。駅を出ると大きなロータリーがあるんですが、そのロータリーをはさむような格好で「フリー・チベット派」と「中国人」がにらみ合う形で声を出し合っていました。片方は「フリー・チベット!」、もう片方は「中国、加油（がんばれ!）」とか。

駅からそのロータリーに出て行くと、警官に聞かれるんです。「あんた、どっち?」と。つまり「フリー・チベット」なのか、「中国」なのかでことなんです。実際の現場はそうではなくて、「フリー・チベット」でも「中国」でもない、さまざまな 이슈が表明されている興味深い空間だったのですが、あの出来事は「フリー・チベット vs. 中国」という対立軸でしか語られませんでした。メディアもその対立軸での報道に終始していました。聖火という「平和の祭典」の象徴であるはずのものをめぐって、これほど不思議で不気味な事態が起こっている。これは長野で終わらずに、中国に行かないとだめだと思いました。北京オリンピックの競技を見るよりも、この不気味な聖火リレーの行く末を中国で見届けたいと思ったんです。

中国は四川省と北京に行きました。四川ではこの年の5月に大地震が起きたために、聖火リレーが大会開幕直前まで延期されていました。聖火リレーは四川を数日回ったあと、北京に飛んで、そこでフィニッシュという予定になっていた。被災地である四川と、最後の北京で聖火リレーを見られたらと思って、両方に行きました。

結果から言うと、聖火は現地で一度も生で見ることができませんでした。そう言っても、たぶん意味がわからないですよ。聖火を追いかけて、リレーの行われる場所に行っていたのに、聖火を見ることができなかった。本当なんです。

動画を一本見ていただきます。(動画が始まる)。これ、北京です。(大変な人波と歓声)。オリンピックの開会式がこれから行われるという日の午後です。右のほうに門が見えますよね。北京101中学という中学校です。聖火リレーがこの中学の敷地内でこれから行われる。聖火リレーが行

われる最後の場所で、ここでのリレーが終わったら開会式の会場に運ばれるんですが、中国国内での聖火リレーは一般には開放されず、ずっとこういうふうにクローズドな状態で行われてきました。

沿道を埋めている人は何万人もいたでしょう。10万人くらいいたかもしれません。けれども彼らが何を見ているかという、聖火リレーではなくて、中学に入っていく車の列です。そのなかに聖火を運んでいる車もあるはずなんです。どれがその車なのかはわからない。なんとも不条理な状況なのに、集まっている人たちは目の前を車が通りすぎると大歓声をあげたり、「中国、加油!」と叫んでいる。

これはどういうことなんだろう。僕は中国語ができないので、シンプルな英語でコミュニケーションがとれる相手に限られたのですが、その場にいた現地の方たちと何人か話げできました。

ある男性は「リレーは中学でやるけど、僕らみたいな一般人は入れないよ」とはっきり言っていました。聖火を見られないことはわかっているわけです。「じゃあ、なぜここに来たんですか」と尋ねたら、「車が聖火を運んでいくのを見たくて」と言う。「車だけ? 聖火は見たくないんですか」と聞くと、「参加できればいいんだ」と。「参加って、何に参加するんです?」と尋ねると、「人混みに参加するんだよ」と言うんです。

英語だと「パティシペイティング・イン・クラウド」という表現でした。聖火リレーを見られないことを彼は知っていたのに、人混みに参加できればいいという。「人混みに参加する」ってどういうことでしょうか?

(流れている動画:「中国加油」と書かれた赤いはちまきをした若者、子供を肩車している父親、五星紅旗の小旗、上空を飛びヘリコプターに大歓声がわく)

で、運良くというか、中国のテレビの取材クルーがいたんです。誰か英語ができるだろうと思って、ちょっと話を聞かせてくれとお願いした。女性記者が応じてくれました。

僕がいちばん聞きたかったのは、聖火を見られないことがわかっているのに、なぜこんなに多くの人たちがここに集まっているのかという点でした。「市民が聖火リレーを見られないのは、おかしいと思いませんか？」と尋ねると、女性記者は「みんな状況を理解しています。見られないならそれは仕方ない。そのときはなるべく聖火のそばに行くんです。空気を感じるために」と解説してくれた。その「空気」というのは何かと聞いたら、彼女の答えは「今が『モーメント・オブ・チャイナ』だという空気」というものでした。

「モーメント・オブ・チャイナ」という表現は日本語にしにくいですが、少し言葉数を使って意識すれば「自分を世界の主人公だと中国が思える時間」といったところでしょうか。だからこそ、ただ聖火を運んでいる車だけを10万人が見に来られたわけです。

そんなふうに北京にはナショナルな空気が充満していました。中国の国営放送である中央電子台（CCTV）には16のチャンネルがあるのですが、そのうち三つか四つで常にオリンピック中継をやっていました。自国の選手を中心に伝えるから、赤いユニフォームと赤い国旗で画面がいつも赤く見えました。その画面の中で、赤い選手たちがちゃんと勝つ。赤い国旗が真ん中のポールに上がっているところばかり目にしていた印象があります。

僕はナショナルリズムにあてられたというか、「ナショナルリズム酔い」したというか、ともかく北京の空気が「さあ、今日もメダルをかつさらって、世界に見せつけるぞ！」と言っているように思えるくらいでした。人間恐ろしいもので、ここまでナショナルリズムを押しつけられると、やはり反発心が芽生えます。僕はふだんサッカーの国際試合に行っても「君が代」を歌いませんが、このオリンピックで日本の試合を見に行ったときはきちんと歌ってしまいました。自分でもかなり驚きました。

一番きれいな色？

森田：そんなふうに、10日間にわたってナショナルリズムにあてられて日本に帰ってきた。まだオリンピックは続いています。で、中継を見ようと思ってテレビをつけたら、この曲が流れてきたんです。NHKのオリンピック放送のテーマソングになっていたMr.Childrenの「GIFT」という曲です。

一番きれいな色ってなんだろう？

一番ひかっているものってなんだろう？

僕は探していた 最高のGIFTを

君が喜んだ姿をイメージしながら

このくらいまで流れて、「北京オリンピック、今日も日本選手の活躍を中心にお伝えます」などといって番組が始まる。なので1日に3回くらいはこの曲の出だしを耳にしていたと思うんですが、北京から帰ってきた直後は本当に驚きました。あきれたと言ってもいい。「一番きれいな色ってなんだろう？」って聞かれても、そんなもの、北京では「金」に決まっていたんです。ところが日本では、別のメッセージがテレビを通じて発せられている。「一番きれいな色」は、それぞれにあっていい、違っていい。そんなメッセージです。

この「一番きれいな色ってなんだろう？」が毎日テレビから流れてくるとなると、それがオリンピックの見方に、もっと大きくいえば社会の空気に何かしら影響を与えないはずはない。まず、こういう選手が出てきました。バタフライで銅メダルを獲得した松田志文。「これが自分色のメダルです」とコメントしています（図17）。まさに「GIFT」のメッセージそのままです。

それから谷亮子です。「田村で金、谷でも金」ときて、この北京オリンピックは「ママでも金」を取れるかどうかだったんですが、銅メダルに終わりました。このとき、配偶者である巨人の外野手、谷佳知選手がコメントを出しました。「目標にしていたメダルの色は違ったけれど、僕には金

■松田丈志「これが自分色のメダルです」



図17

色に輝いて見えます」。これも同じノリですね。

中国から帰ってきたばかりで、日本の空気を新鮮に感じる事ができたためだと思うのですが、こういう「やさしさ」がメディアスポーツの中に強烈に漂っているのがわかった。「結果よりも過程って大事だよ。頑張ったんだからいいよね」という余裕のある身振りが強く感じられた。

中国には劉翔というハードルの金メダル候補がいました。しかし、けがを隠してレース直前に棄権しました。劉翔はネット上で大バッシングされました。けれども日本は、だめだった選手にみんなとてもやさしかった。マラソンの野口みずきは練習のしすぎで足を痛めて出られなくなって、代わって期待をかけられた土佐礼子は外反母趾の足を痛めて途中棄権した。選手団の主将を務めていた柔道の鈴木桂治は1回戦で負けた。でも、そんな選手を世論もメディアもほとんど責めなかった。よくも悪くも大人の対応です。だからガツガツと聖火リレーをやって、ガツガツとメダルを取りにくる中国のことが鼻についたりもしたのでしょう。

メディアジェニックなアスリート

森田：さて、第二のポイントに移ります。こうい

うメディアスポーツのつくり出す空気、紡ぎ出す物語にアスリートが加担するケースというか、度合いが増してきているのではないかというのが、僕の仮説です。物語づくりへの「協力」というか、「共生」というか、あるいは「共犯」というべきか。

「フォトジェニック」という言葉があります。それと似たような意味でメディア映える「メディアジェニック」なアスリートがすごく増えてきました。石川遼、斎藤佑樹、そういう選手たちです。

でも、そこまでのビッグネームでなくても、とてもメディアジェニックな言葉を吐く選手が増えてきている。2010年のバンクーバー冬季五輪を例にとると、ノルディック複合で小林範仁という選手が7位になりました。後半の距離でとても頑張っ、一時はトップに立った。そのときのコメントが「僕のハートが行けっというんで」。いいコピーですよ。

同じバンクーバー大会でのコメントでもう少し有名なのが、モーグルの上村愛子選手の「どうして、一段一段なんだろう」。なぜ「一段一段」と言っただご存じですよ。上村選手は4度目のオリンピック出場だったんですが、それまでの順位は7位、6位、5位と一つずつ上がってきて、バンクーバーでは今度こそメダルをと期待されましたが、惜しくも4位だった。それをこんな名コピーに落とし込んだ。

もちろん、この言葉に嘘はないでしょう。けれども上手なんです。メディア映える言葉です。こういう言葉が次から次へと出てくることは、たとえば20年前にはなかったんじゃないか。自分がメディアに映るということ、自分の物語が語られるということについて、アスリートが意識的になっている表ではないかと思います。

先ほど玉置先生が、北島康介が北京オリンピックで金メダルを取ったときに言った「なんも言えねえ」の話をされていましたが、実はあの北島の言葉も「名コピー」だったのではないかという、うがった見方もできてしまいます。

このあたりまで聞いていただいて、「おまえ、それは考えすぎじゃないか」と思う方がいるかもしれません。でも、ちょっと前までこんなに積極的に「物語」をつくるアスリートがいなかったことは確かだろうと思います。

たとえばその昔、こういうアスリートがいました。1964年の東京オリンピックのマラソンで銅メダルを取った円谷幸吉です。これは国立競技場に戻ってきたときの写真(図18)ですが、このとき2位なんです。ところが、後ろに映っているイギリスのヒートリーという選手に抜かれて、円谷は銅メダルになってしまった。それでもよかったです。日本選手で最も期待されていたのは君原健二で、どんな色にしても円谷がメダルを取るなんて誰も予想していなかった。

でも銅メダルを取ったら、「じゃあ、次の68年のメキシコ五輪では金だな」と期待が高まっていた。ところが円谷幸吉はメキシコには行っていません。なぜか。大学院生の若い方たち、ご存じですか。自死したからです。こんな遺書を残して。

父上様、母上様、三日とろろ美味しゅうございました。干し柿、モチも美味しゅうございました。

敏雄兄、姉上様、おすし美味しゅうございました。

勝美兄、姉上様、ブドウ酒とリング美味しゅうございました。(後略)

家族・親族の名をひとりひとりあげていって、何々が「美味しゅうございました」と礼を言い、最後に「幸吉はもう疲れ切ってしまって走れません」と書いている。当時、川端康成がこの遺書を評して「千万言もつくせぬ哀切である」と書いたそうです。

自殺した理由は単純なものではないでしょうが、もともと腰が悪くて、すでに東京オリンピックのときにも爆弾を抱えているような状態だったといえます。その後はメキシコをめざすどころ

■円谷幸吉



図18

か、練習さえできる状態ではなくなっていった。

けれども周囲の期待は、どんどん高まっています。円谷は自衛隊員で、そのころ結婚を考えている相手がいたらしいのですが、上官から「メキシコがあるのに結婚どころではないだろう」と諭されてしまう。そんなプレッシャーに押しつぶされたと言い切っているかどうかはわかりませんが、少なくとも現在のアスリートにはない心性の持ち主だったことは確かではないかと思っています。

さて1964年には生まれていなかった方でも、1996年にはこの世に生を受けていたでしょう。この頃の五輪アスリートも、今とは違う心性を持っていたと言えるかもしれません。

水泳の千葉すずをご存じでしょうか。96年のアトランタ五輪に出場しました。

千葉は90年代にとっても期待された自由形の選手でした。彼女の歩みを振り返ると、92年のバルセロナ五輪では16歳だったのに100メートル自由形で9位、200メートルで6位、400メートルで8位となかなかの成績でした。

95年、オリンピックの前年に行われたパンパシフィック水泳選手権。アメリカやオーストラリアの選手が出てくるので、オリンピックの前哨戦としてはかなり意味があったのですが、千葉は200メートル自由形で優勝しました。翌年のアトランタ五輪に向けて、いよいよ期待が高まりました。

ところが、千葉はこう言ってしまった。「2度目のオリンピックは楽しみたい」。その結果が200メートル10位、400メートル13位……という散々な成績でした。

大バッシングが始まりました。この大会では千葉だけでなく、女子水泳陣がみんなだめで、日本水連の幹部が「千葉菌がうつった」と言ったとまで報じられました。「千葉菌」ってわかりますか？ バイ菌の菌です。「千葉があいいうことを言うから、その気分がまわりに伝染して、チーム全体が惨めな成績に終わった」ということです。それくらい叩かれました。

このバッシングに千葉もキレました。久米宏の『ニュースステーション』にインタビューされて、「オリンピックは楽しむために出た。そんなにメダルというなら、自分でやればいいじゃないか。日本の人はメダルきちがいだ」とまで言った。これは今でも、さまざまな意味合いから解釈できる発言だろうと思います。

千葉すずの物語には、まだ続きがあります。これだけバッシングされても、彼女はめげずに競技を続けました。そして99年には日本選手権で二種目を制覇した。2000年にも200メートルでオリンピックの標準記録をクリアして優勝した。ところが水連に嫌われてシドニー五輪の代表には選ばれなかった。千葉はスポーツ仲裁裁判所に提訴しましたが、却下されてしまった。

千葉すずがバッシングされた1996年の日本は、「メダルきちがい」の集まりだったかもしれない。ところが2008年の北京では「メダルの色なんかどうでもいい。君に似合う色を探せばいい」という曲を背景に、日本人はオリンピックを見ていた。やさしさというか余裕というか、昔はなかったそういうものが、良くも悪くも今の日本のメディアとスポーツ、あるいはメディアスポーツに生まれているのだと思います。今だったら、もしかしたら円谷幸吉は死ななくてよかったかもしれないし、千葉すずももう少し幸せな競技生活を送っていたかもしれません。

南アフリカワールドカップの物語

森田：さて、三点目に移ります。2010年のワールドカップ南アフリカ大会の物語です。

ちょっと思い出していただきたいのですが、あのワールドカップの前には二つの「常識」がありました。一つは「南アフリカは危ない」。もう一つは「日本は今回だめだ」。0勝3敗で帰ってきても、誰も驚かないような雰囲気がありました。スポーツ新聞のレベルだと、もう「崩壊」していました（図19）。一般紙でも「日本 不安抱え南アへ」「見えぬゴールの道筋」などと、しっかり書かれていた（図20）。あの頃テレビのニュースでは「岡ちゃん（岡田武史監督）じゃだめで



図19



図20

しょ」というようなファンの声を、そのまま流していました。ワールドカップの視聴率が欲しいはずのテレビ局が、大会前の雰囲気盛り下げのようなことを平気でやれるくらい、日本代表への期待値は低かった。

ところが、ご存じのように日本はベスト16にまで進みました。先ほども言いましたが、僕は開幕から決勝まで南アフリカにいて、日本の試合はスタジアムですべて見ました。

ポイントは、そのあいだ僕は日本のメディアにほとんど触れていないということです。メディアスポーツが発していた物語をほとんど知らないわけです。で、日本に帰ってきて、たまっていた新聞を読んだり、録画していたテレビ番組を見たりしたら、これはもう、物語がうねっていました。

新聞の見出しを追っていくと、これ(図21)は初戦のカメルーンに勝ったときのものです。「日本結束 希望の白星」「4年前の悪夢 全員で乗り越えた」。これだけです。スポーツ記事の見出しではないともいえるでしょう。なにしろ、いちばん大きな文字が「結束」と「希望」ですから。

物語はこの初戦に勝ったことから語られはじめました。大会前の下馬評があれほど低かったのに、なぜ勝てたのか。ご存じでしょうが、岡田監督はヨーロッパでの直前合宿で布陣を大きくいじりました。それまでは中村俊輔が中心だったチー

ムを、本田圭佑をワントップのフォワードに持ってきて彼のチームに変えた。正ゴールキーパーも替えました。

選手をめぐるのは、「結束」「一体感」の物語が奏でられていきました。どの新聞にもだいたいこのようなストーリーが書かれています。直前合宿でキャプテンの川口能活が選手だけのミーティングを開いた。そのとき、田中マルクス闘利王が「俺たちは下手なだから、もっと泥臭くやらないと勝てるはずがない」と言った。このひとことをきっかけに、みんな腹を割って話しはじめて、「あそこはああすべきだ、ここはこうしたほうがいい」という議論になった。そうして勝利をたぐり寄せた……。

初戦のカメルーンに勝ち、オランダには負けただけで0-1で抑え、デンマークには3-1で勝って、ベスト16にまで進みました。最後はPK戦でパラグアイに敗れました。現地で見ていると、いい試合もあったし、そうではない試合もあったと思います。しかし僕は「一体感」の話はまったく知らないんです。日本に帰ってきて、その物語がうねっていることに本当に驚きました。選手のミーティングで結束が生まれた、布陣が大きく変わったけれど控えに回った選手も腐らずにベンチを盛り上げた……。そんな話がメディアにはあふれていました。この記事も三番目に大きな見出しが「選手・ベンチ、一つになった」となっていま



図21



図22

す(図22)。

「一体感」だけが勝因なら、チームが結束さえしていれば勝てることになってしまう。スタジアムで日本代表の4試合を見てきた身に、この物語は強烈な違和感がありました。現地で見ているかぎり、日本の躍進は「個の力」に支えられたものだと思えたからです。2ゴールを決めた本田圭佑、突破とアシストが光った松井大輔、ヨーロッパの専門家からもフィジカルの強さを注目される中澤佑二と闘莉王の二人のセンターバック。これまで日本の弱みとされてきた「個の力」を、彼らは高いレベルで見せていたはずなんです。ところが日本のメディアはその点にはあまり触れず、彼らが一体感に寄与したことばかり語っていた。

典型的なのが、ラウンド16進出を決めたデンマーク戦の後の報道です。日本が決めた3点はFKが2本と、本田の見事な切り返しから岡崎慎司が流し込んだゴールです。「個の力」の結集です。それなのに直後に書かれた記事は、やはり「一体感」「結束」「組織力」がキーワードになっていました。

戦いを終えた日本代表が関西国際空港に帰ってきたら、なんと4200人が出迎えた。1カ月前前に「岡ちゃんじゃだめでしょ」と言っていたのに、この騒ぎです。新聞も「岡田日本、世界も驚いた本田、遠藤のFK 前評判覆し団結力で4発」とべたほめでした(図23)。



図23

ところが、この物語に抗っているかのように見える選手をひとり見つけました。関西空港に帰ってきた直後に行われた記者会見の動画の一部を見ることができます。

本田圭佑「後ろの選手がきっちり守ってサポートしてくれたおかげで……」

この会見は、みんなひな壇に並べられて、こういう堅いコメントを口にする場所になっています。ビッグマウスと呼ばれる本田圭佑でさえ「後ろの選手が守ってくれたおかげです」と言わざるをえない雰囲気だということです。

しかし、この空気のなかで、ひとりだけ違うことを言った選手がいました。ディフェンスの中澤佑二です。

アナ「中澤さん、日本のディフェンスは世界の本当に名のあるフォワードや攻撃陣をよく抑えたと思います。ご自身のプレーも含めてそのあたりの充実度はいかがだったでしょうか」

中澤「まあ、やられた局面も思い返せばたくさんありますので、結果は非常にいいものだと思いますけれども、まあ家に帰ってしっかりとVTRを見たときに、あ、やられたなという局面がけっこうあるかなというのがありますので、ゆっくりと家に帰ってから分析できればなと思います」

アナ「4年前のドイツ大会も出場されています。今回のチーム、日本のサッカーのレベル。4年間で何か向上したなと思えるものがあったら教えてください」

中澤「何でしょう。僕はわからないです」

「何でしょう、僕はわからないです」——そう言っているんですが、その前に中澤選手は「早く家に帰ってビデオを見たい」と二回言っていました。こんなお約束の会見なんか出ないで、早く帰りたいかたかったのかもしれませんが。「何でしょう、僕

はわからないです」。この言葉は、ひとりのアスリートが物語にささやかながら抵抗した瞬間なのかなとも思います。

スポーツをめぐる物語—なでしこジャパン

森田：さて結論です。スポーツをめぐる物語といえば、いま無視できないのはこの人たち、なでしこジャパン。そして、彼女たちと東日本大震災との結びつきではないかと思います。優勝したワールドカップでは、海外からの被災地への支援に感謝する横断幕を出していました（図24）。なでしこは被災地に元気をあげて、なでしこも被災地から元気をもらった。日本に「絆」をもたらした……というようなことがいわれていました。

なでしこたちが見せたのは、日本人の持つ「粘り強さ」と「あきらめない心」だったとされました。うがった見方をすれば、震災後のいま最も望まれている「理想の日本人像」がそこで語られているともいえるでしょう。

僕の今日の「とりあえずの結論」は、こういう物語はスポーツの領域に限定されたものではないということです。「いかに生きるか」の物語であるということ。それが往々にして「日本人としていかに生きるか」の物語になっているということです。

もしかすると今年2011年くらい、「日本」「日本人」という言葉が使われた年はないかもしれませんが。これから「ポスト3・11」の時代に、メディ

アスポーツがどんな物語を紡ぎ出すのか、注意してみていきたいと思っています。

近代スポーツの報道と物語

松浪：ありがとうございます。現在のメディアとスポーツの関係、メディアスポーツには物語があふれている、そういったことを例とともにお話していただきました。

このまま、先生方にいろいろお話を伺っていきたいと思います。今、森田さんからメディアスポーツには物語があふれているという論が提示されました。

中房先生にお伺いしたいんですが、ローカルな出来事からナショナルな出来事を報道するようになっていったと先ほどおっしゃっておられました。そこで18世紀後半くらいから19世紀、近代スポーツがちょうど生まれてくるような頃の、イギリスまたはアメリカのスポーツ報道のなかで、こういった意図的になのかどうかかわからないですけれども、物語が付随されて報道されるというようなことはあったのでしょうか。

中房：正直なところ、記述の内容の分析については深く立ち入ったことがありません。はっきりとは言えないのですが、たぶん18世紀のタブロイドの時代ですね。少なくともタブロイドの時代であれば、事実を脚色する有形無形の力がつよく働いていたように思います。

大きな流れから言いますと、18世紀の時には事実の報道というのは軽視されがちで、面白おかしい物語を伝える。それから徐々にリザルトですね、結果の報道に偏ってくる。ところが徐々に19世紀後半になってきますと、試合や選手により密着した取材が始まってきて、あるいは自分自身の体験を物語るというような。そもそも新聞の記事を誰が書くかという、小説家が書くことも珍しくなかったので、どうしても物語っぽい語り口も出てくる。コナン・ドイルも新聞に書いたりですね、サッカーもやはり新聞記事を書いたりしています。そういうこともありますので、当然、物

■ そして、彼女たちの物語は...



図24

語性というものが出てくるように思います。

図25をご覧ください。これは授業の中で学生に話しながら思ったんですけども、スポーツ報道には大きく二つのベクトルがある。一つはスポーツの技術、戦術、選手自身の心理をきちんと細かく報道するベクトル。他方では、スポーツの人間性、国民性に焦点を当てようとするベクトル。これが物語や神話になると思いますが、スポーツ報道には大きくこういう二つのベクトルがあると考えられます。一部のコアなファン、あるいは馴染みのあるスポーツであれば、ベクトルの下の方を知りたい。ところがここに興味を持つ人たちというのは非常に限られている。それに対して、一般大衆ですね。馴染みのないスポーツあるいはより多くのスポーツを応援する人たちをひきつけるためには、下の方ではなくて、上の方ですね。人間性、国民性、こういうところに焦点を当てることがとても重要で、それによって大衆をひきつける。そういう構造になっていると思ったんです。

テレビは新聞よりも圧倒的に視聴者が多いので、テレビであればこちら、どうしても上の方に比重が多くなる。反対に、雑誌などはかなり専門的なことにテーマを掘り下げられます。コアなファンを相手にしているので、雑誌は下の方に重点を置ける。こういうふうな構造になっているのかなと思いました。歴史的にみても、19世紀の新聞の大衆化は、おそらく記事の内容の質的变化を伴っていると思います。より多くの大衆を相手に

している限りは、どうしても専門的な競技の妙味に深入りすることはできず、競技とは無関係な人間物語などが描かれやすいように思います。もし国ごとに歴史性があるとすれば、ここ、つまり「人間性」や「国民性」、あるいは「物語」や「神話」の中身です。ここの中身は、たぶんそれぞれの国民性やら、あるいはイギリス独自とか、アメリカ独自とか、日本独自とか、比較的ステレオタイプ化した誰にでもわかりやすいストーリーや神話が語られるのかなと思います。

松浪：ありがとうございます。

欧米のスポーツ報道のはじめから、物語性というものが絡んでいたと考えていいのかなと思います。結局、どのような物語が語られてきたのかということが、その時代時代を映し出すということになるわけですね。そうになると、どういった物語が組上に載せられたのか、また今後どのような物語が組上に載せられていくのか、ということは、スポーツ史研究としても、ひとつの大きな視点になるのかなと思います。

真のスポーツ報道

中房：玉置先生にちょっとお聞きしたいなと思ったところが、抄録にあります。真のスポーツ報道とは何かということです。抄録の37ページ、4番目の項目の「新聞が真のスポーツ報道を心がけよ」というところで、ページの下から4行目「新聞などの活字メディアは、テレビが報じない部分、……を意識しなければならない。スポーツは歴史的、社会的、哲学的なものを含んだ人間の営為である」とあります。本質的なものを内包している、と言いますと、先ほどの図25でいうと「技術・戦術・心理」「競技の妙味」とありますが、ここよりもさらに下のレベルに深い歴史的、哲学的な問題があって、そこが真の報道につながるんだ。そのように受け取ったんですが、そんな理解でよろしいでしょうか。

玉置：それほど高邁なことではないんですけど

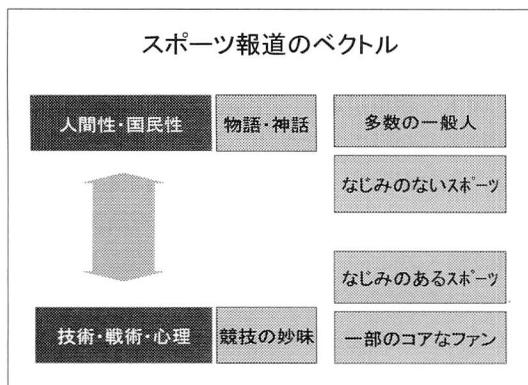


図25 スポーツ報道のベクトル

も、下というよりかこの上を突き詰めていくというような形になるのではないかと気がするんです。人間のやる行為ですからその中にいろんな国民性、人間性、性格いろんなものが反映されて、そこから物語が出てくるわけじゃないかなと思っています。

だからたとえば一番単純な重量挙げなんかでも、実際取材に行くと、ただバーベルを持ってぐっと挙げるだけだと思いがちですが、強いトルコとかいわゆる旧ソ連の中でも重量挙げの強い地域とかがありますよね。そういうところの人の挙げ方と、ソ連の人と日本は違うんです。呼吸の仕方とか。選手は、競技の台に上がって2分間かなんかで挙げなきゃいけない。そうすると顔などを「パッパッパ」とたたいたりするんだけど、いきなりバーベルをつかんで「ぐっ」と挙げる人と、なんか熊みたいにずーっと動き回って、しかも観客ばかりこうやってみる選手とかいるんです。選手によって違うのかなと思ったのですが、なんとなく国民性にあるみたい。だからそういうのを詳しく観察して、比較して記事化すればより面白くなるんじゃないかというふうに思ったことがあるんです。

「日本人」の枠を壊す物語

中房：森田さんに質問させてください。最後の、「日本人としていかに生きるか」という物語が紡ぎだされるということですが、これからどんどんインターネットの時代で、国際化も進んでいきます。そうすると、なにも日本人だけが日本のスポーツを取材するわけではない。日本人のスポーツを外国人が日本語で語る、ということもどんどん出てくるように思います。そうした場合に必ずしも「日本人」という枠に縛られず、むしろ「日本人」という枠を壊すような物語が外国人の手によって書かれる。そして日本人自身がそれに触れて、新たに（従来の「日本人」という枠に縛られない発想に）目覚めてくるというような動きが出てくるのではないか。あるいはその可能性というか、国際化というところで、何かありますか。

森田：もちろんそういう流れが来たら、とても面白いですよね。今まで外国人が日本のスポーツについて書いたものでいうと、すぐに思いつくところではロバート・ホワイティングの『菊とバット』³⁷⁾とか、『和をもって日本となす』³⁸⁾といったあたりでしょうか。これらは日本人が大好きな日本人論です。それをスポーツを通じて書いた「スポーツ日本人論」です。いまおっしゃった「日本人」という枠を壊すようなものというのは、その逆ということになるでしょう。もしかするとそれは、日本の出版社が「売れないからやめておこう」と考えるかもしれません。

いま思い出しましたが、「日本人」の枠を壊す方向にある外国人のスポーツ本を僕は1冊翻訳しています。サイモン・クーパーという、『サッカーの敵』³⁹⁾を書いたイギリスのジャーナリストのものなのですが、『「ジャパン」はなぜ負けるのか』⁴⁰⁾という本を去年2010年に出しました。

タイトルからおわかりかと思いますが、出したのは南アフリカのワールドカップの前です。この本の中に、サッカー日本代表が勝てないのは日本人だからじゃない、サッカーの実力は国や国民の文化によって規定されるものではないと論じた章があります。たとえばフース・ヒディンクというオランダ人監督がいます。オランダ、韓国、オーストラリアという別々の代表チームを率いて3大会連続でワールドカップに出た。そのために彼が何をやったかという、韓国代表なら韓国的とされる文化、オーストラリア代表ならオーストラリア的なものを破壊したと、クーパーは書いています。

そういうものがもっと出てくれば、僕らのまわりにある手強い物語を崩す一助になるかもしれません。なるといいなと思います。

震災に結び付いた物語

松浪：ありがとうございます。

メディア。メディアと言っているのかどうか時代的な問題もありますけども、スポーツに限らずメディアは物語を伝えているようです。例えば日

本でも新聞紙上で優秀な日本人の身体モデルを言説化するという事は明治時代からもありました。新聞のなかでも、スポーツに関連する記事のなかでも、日本人はこうあるべきだ、というような行動規範を示すことは、明治の中頃からあったわけです。欧米でも、何の価値観を表明したかはわからないですけども、メディアが物語を伝えることがあった。そうすると、今後もスポーツを通じてメディアが何らかのメッセージ、物語、ナラティブを発信し続けることは止められないのかなという気がします。そういったなかにもうまくはまったのが、6月末からのなでしこジャパンだったのかな、と私は思います。

なでしこジャパンには、いろんな物語が付与されました。鮫島彩⁴¹⁾のことが報道されるときには必ず福島第一原子力発電所で勤務していたことが付随され、「福島の人を応援しています」という話がでてきましたし、岩清水梓⁴²⁾がインタビューを受けた時も、必ずおじいちゃん、おばあちゃんのいる被災地を元気にしたい、という話が出てきました。

今、バレーボールをテレビでやっていますけれども、確か初戦のイタリア戦のオープニングでは、日本女子バレーボールチームが被災地に行って、犠牲者を悼む。そういったシーンから、スポーツが語られ始めている。たぶんここで「それは良いじゃないか」「スポーツがそういう力になればいいじゃないか」というふうに考えればそれでいいのかもしれませんが、怖いのが、単一の方向に物語が作られているということです。物語が一つに限られることがいつも怖いという気がします。

森田さん、今のメディアの状況から、どのようにお考えですか。

森田：被災地を思う、震災の犠牲者を悼むというのは、ある意味「正しすぎる」ことなので、かえって居心地が悪いという感じはありますね。

被災者——被災者というか、先日いわゆる被災地によろやく行って、「被災地」という言葉を使

うのはやめようと思ったんです。東北を「被災地」と呼びつづけると、それ以外の地域は傷を負っていないことになる。そんなことはない。それに、「被災地」という言葉を使うことによって、この震災がしょせん対岸の火事になってしまう。現地に行って、津波の爪跡を見て、あの瓦礫の臭いを感じて、そんなふうに思いました。

スポーツと被災地を結びつけたメディアの物語で、いちばん覚えているのはNHKの「ニュース7」がなでしこジャパンのワールドカップ優勝を報じたときのものです。仮設住宅で二人の男性が夜中に決勝を見ている。仮設住宅は音が響くという了解があるから、声援も「よし、よし」とか小声でやっている。そして、「やべえ、世界一になっちゃうよ」などと言っている。

仮設住宅にその夜テレビカメラが入っている時点で、それは物語をつくりに行っているわけですよ、テレビの側から。僕、その仕事はしたくないなと思いました。受け手としても、そういうふうにつくられた物語にさらされるのは嫌ですよ。バレーボールだったら、バレーボールという競技のことをきちんとやればいだろうと思うんです。

無理やり結びつけなくていいのに結びつける。それもあって、いま松浪先生がおっしゃったように、単一の方向にいつてしまいそうな雰囲気になる。なでしこジャパンは、いま世界一です。来年ロンドンオリンピックで挑まれる立場になりますが、そのときメディアがどんな物語を語るかですね。

松浪：うまく言えないんですけど、僕も、きっとその時には、違う何かの物語が付随されるのかなという気がします。それがなんなのかはまだわからないです。今と同じ物語かもしれません。しかし、そういったことを考え続けることは、単一方向ではなく、違ったベクトル、見方を探すということもあるし、必要なのではないかと思います。

それから、さきほど森田さんが、被災地、被災者という言葉を使いたくないとおっしゃっていま

したけれども、確かに僕もそれは感じます。被災地といってしまうとまるで自分は安全圏にいるように思えてしまう。被災者といってしまうと自分ではない他者のような気がしてしまいます。そういう意味で震災とその後の原子力発電所の事故などを含めて、あの出来事を他人事のようにしてしまう名付けではないか、という気がするんです。

とはいえ、甚大な被害を受けた所へ「なんらかの力を差し伸べる」という言い方もよくないのかもしれませんが、「スポーツに何ができるのか」ということが問われたときに、「何か出来ることがあればいいな」とスポーツに携わる者としては考えるわけです。

私事になりますが、私は青年海外協力隊のスポーツ隊員としてフィリピンに赴任したことがあります。途上国でスポーツなどを教えることが、その国の人づくり・国づくりの役に立つという前提で、青年海外協力隊があると思っています。だからやはり、こういった被害を受けた場所で「何かスポーツを通して力」を、ということになると、なでしこジャパンのようなこういったメッセージ、ナラティブが一色になって押し付けられてしまうのかなという気がします。

スポーツに何ができるか

松浪：中房先生にお伺いしたいんですけども、実際大きく揺れて、なおかつ地震だけではなく今回は目にみえない、何を恐れているのかわからない、たぶんこっちのほうが怖いと思います。だからこそ、どこにいるからとか、誰かだけが被災者だっていうことではなくて、誰が被災者かということ特定できないと思います。特定の被災者というのはどこにもいないのかもしれない（あらゆる人が被災者になりうるという意味において）。そういう状況下において、今後「スポーツに何ができるか」ということを問うのもどうかと思うんですけども、中房先生の生活実感としてどのようにお考えですか。

中房：いくつかお答えしたいことはあります。ス

トレートに答える前に、少し前提となる部分に触れさせて下さい。

3月11日以降、スポーツ報道の言葉に何か変化が起きたかという「何も変わっていない」「恐ろしいほど何も変わっていない」と私は感じています。「今の日本は何かおかしい」「現状は何かおかしい」と従来から思っていた人は、3月11日以降、なおさらその気持ちを強くした。ところがそれ以前、「現状はこのままで良い」「すばらしい」「もっと頑張ればやれる」ともともとと思っていた人たちは、3月11日以降でもその考えを崩していない。あれだけ大きな出来事があったというのに、です。3月11日の前と後とで、前者の考えの人と後者の考えの人の全体的な割合が劇的に変化したかという、ほとんど変わっていないと思います。だから人々の意識は根底では何も変わっていない、というのがまず一つの大きな印象です。

つぎに「被災地」と「被災者」は区別する必要がある。昨日、ちょっと行ってきたんですが、これは空港近くです（図26）。日和山。全国的には日和山というと石巻が非常に有名になりましたが、海沿いの平地で小高いところは日和山と呼ばれている場所がいくつもあります。被災地には肝心の被災者はいません。なぜかという、計画的な土地利用が今後どうなるかわからないからです。県としては国の予算を引き出したいので、国の決定を待つまで動かない。市民は早く戻りたいと思っているのに、結局戻れない状況がずっと続いていて、被災地には誰もいない。そういうところに私は11日、花を手向けてきたんですけども。以前はもっと花束があったんです。ところがどんどん少なくなって。被災地でもこうしてどんどん忘れられている状況があるのを見て、寂しい思いをしました。

何も変わってない状況は他にもいっぱいあります。これは仙台市です（図27）。仙台市でもまだ信号が止まっているところがあります。ということは他の地方、田舎になりますと、同様の状況がたくさん残っているわけです。ここは線路があったところですが、やはり移転の問題が絡んでその

まま置き去りです(図28)。閑上(ゆりあげ)という空港の近くの中学校ですが、それもそのままです。3月11日の状態、全くそのまま(図29)。ホントに時間が止まっているなあ、という印象です。船もまだまだあっちこち残っていますし。こういう状況を今でもいくらでもみることができます。

しかしそういう状況でも海で釣りをやっていたりする。懲りないというか、海が怖くないのかなと思うんですけど。同じ経験をして、それに対する気持ちの持ち方や行動の仕方が、人によって大きく違うということ、今回つくづく思いました。ある人はそんなことは関係なく、どんどん今まで通りやりますし、ある人は非常にショックを受けてもう立ち直れない状況の人もい

ます。大きく差がある。これは福島の南相馬市のある小学校です(図30)。除染作業をやっている。朝から夕方まで。子ども達は当然スポーツどころではない。

「スポーツに何ができるか」という話によりやく辿り着きますが、私の率直な考えは「スポーツ



図26 日和山(宮城県名取市)

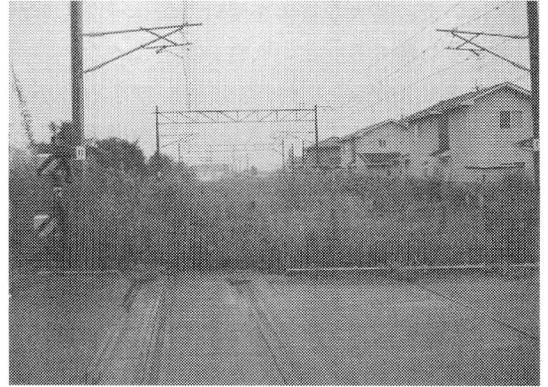


図28 宮城県巨理町



図29 宮城県名取市



図27 仙台市荒浜

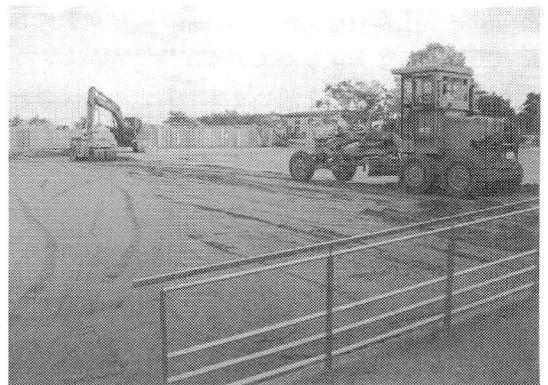


図30 福島県南相馬市

は何もできません」。こういう極限状況の前では「何もできません」というところから出発して、かすかな手がかりや、復興や支援に結びつく「物語」を作る必要があるのではないかと、私はそういう考えです。たぶん松浪先生の立場からすれば、「スポーツで何かができる」ということをご自身で経験してきて、なおかつ、これからもそういうことを土台にしてスポーツの可能性を広げていきたいというお立場だと察しますが、ここはあえて「スポーツは何もできません」と強調したいと思います（スポーツばかりではなく、私が志してきたスポーツ史研究という学問的営為さえも眼前に広がるカタストロフィの前では完全に無力である）。そういう極限的な状況をふまえて「いったい人間とは何か」、「スポーツとは何か」、「スポーツというものはいったいこれまでどうあり、どこへ向かっていくのか」ということを是非とも考えなければいけない時期に立っているにもかかわらず、流れている、メディアに乗っかっている言葉というのは3月11日以降も何も変わっていないなあ、というのが今の私の実感です。

松浪：ありがとうございます。

究極の問いが出てきてしまいました。「人間とは何か」、「スポーツとは何か」。やはりこれが問われ続けるといけないのかな、と考えます。

フロアからご意見等々ございましたら、受けたいと思うのですがいかがでしょうか。

スポーツメディアの言説

藤原：日本オリンピック委員会の藤原です。

これは玉置先生と森田先生の両方に伺いたいのですが、一つはスポーツメディアというものの定義に関してです。先ほどからスポーツメディア、また森田さんからメディアスポーツ、あるいは今、中房先生がスポーツ報道という言葉が出てきましたが、例えばテレビの中継というもの、テレビのニュース番組というもの、あるいは翌日の新聞報道であったり、新聞の囲み記事、それにフォト、これらはそれぞれスポーツメディアでありま

すけれども、かなり役割が違うのではないのでしょうか。

テレビの中継と一番近いのはフォトかもしれません。これは両方とも試合を映しているという点では一致しておりますし、そこに言説の入る余地は非常に少ない、という気がします。そういうものはお互いにスポーツメディアと一つに言いながら、必ずしも同じではなく、それを一緒に議論するというのは、やはり全体に議論の論旨が混乱するもどではないだろうかという点です。玉置先生がどうお考えになるかということをお伺いしたいです。

もう一つ、森田先生に伺いたいのは、先ほどの選手の答え方ということに関連しますが、最近、ホリプロとかサニーサイドアップなど、大体は所属する会社・エージェントがあるわけです。そうすると、「こう答えなさい」という指針があったり、あるいは新聞記者に「ちょっとこの二行落としてください」という要求が来ることもあります。結局、最初から意図された言説のための答え方というものがあるのではないかと思います。反面これは選手のセカンドキャリア、それから引退した後もテレビに出続けられる、という経済的な理由もあると思いますが、森田さんはその辺をどのようにお考えですか。

玉置：活字といわゆる電波媒体は同じメディアの中でも全然違います。

例えば警視庁の記者クラブは事件報道ですけども、ここはテレビと新聞社は、はっきり分かれています。大阪府警なんかも分かれています。これは昔一緒になっていて、取材をしているときにトラブルがあったということから分かれているわけです。もちろんそれぞれに特色があって、それでいいんですけれども。

やはり議論をすると、スポーツの番組、例えば新聞側からというかみる側からすると、テレビの番組に、キムタクが出てきて、「ガンバレ、なんとか、なんとか」なんていうのはおかしいじゃないか。「専門家じゃないやつが出てきて何をヤン

ヤン言っただ」ということになるわけです。だけど選手がやっている一つの番組だというふうに捉えれば、それを応援する。盛り上げる。視聴率を高める。民放の場合ですね。「だから必要なだ」。こういうことを聞いたことがある。こういう考え方っていうのは、活字側からすると全くないんです。

それと例えば、球場や体育館には記者席という場所があり、新聞記者は当たり前に使っています。球場では、ラジオやテレビの実況放送もしていますよね。あれは放送局がお金を払い場所を借りているわけです。だから取材も、その体制からして全く違うわけです。

いつも「放送席、放送席、ヒーローインタビューです」っていうのがありますよね。あれホントにいつもくだらない事言っているなというふうに思うわけです。もっと聞くことあるだろうと思うのに、「今日は奥さんが来ていましたがどうでした？」とか「お子さんが誕生日ですね」って言ったら「だから一生懸命やりました」とか。当たり前じゃないか、と思ったりするんです。それから高校野球のときもそうです。インタビューでそんなことばかり聞いたりするとか、これはホントにスポーツ報道なのかなという気がするんです。

だけどスポーツ報道は、試合だとすれば、試合が終わってからそれを補完するためのインタビューなんだと、そういうふうに考えているのかなと思ったりして、現場ではよくケンカになるわけです。

例えばテレビで監督インタビューしているときはおとなしくしているんですが、終わった後に「うるさい、邪魔だ、向こう行け」とかなんとか言っただけでケンカになっている。これはオリンピックのときの現場でも起こっているんです。後から考えたら、どうしてそんなことになったのかというと、違っているから、と言ってしまうと、それは媒体として違うからなんですけども、やっぱりスポーツジャーナリズム的な考え方を共にすべきじゃないかなという気はするんです。そうすると、テレビの場合は、もうちょっとそういう姿

勢、方向性は、今のような娯楽性、エンターテイメントではなくて、「じゃあ何したらいいんだ」と言われますと、ちょっと明確に言えませんが、あまりにも楽しければいい、面白ければいい、言ってみれば視聴率が取ればいい、という形に傾斜し過ぎている。その為には非常にいいツールであるとは思いますが。女子マラソンは特に2時間半で終わるからということですけど。スポーツはその為に行っている訳ではありませんから、そういう本質的なことがもうちょっとなんとかならないのかというような気がしてしょうがない。それをどのようにして直すかというのは、ホントこれからの大変大きな課題だと思います。

森田：ご質問は、所属事務所などから「こう言いなさい」と言われて、つくられる言説をどう解釈するか……ということですか。

藤原：選手が引退した後の経済的な問題がその背景にあるのではないかとこの点です。

森田：上手に話したり、うまくインタビューに受け答えしたりということが……ということですよ。それは確かにつながっていくでしょう。セカンドキャリアだけでなく、もちろん現役の間にも大事なことだと思います。プロ野球でもJリーグでも、新人にはメディアトレーニングを受けさせるじゃないですか。さらにそういうプロダクションに入ったりして、もっとうまくなるアスリートもいるだろうと思います。

たとえば先ほど例にあげた上村愛子の「どうして一段一段なんだろう」という名ゼリフを、仮に所属事務所が作ったのならすごいと思います。あるいは北島康介の「なんも言えねえ」があらかじめ所属事務所によって準備されていたとしたら、それもすごいですよね。

それよりも事務所がどうのではなく、アスリートにはメディアに対してしっかりした言葉を伝えてほしいと思いますし、メディアはアスリートからきちんとした言葉を引き出してほしい。それは

セカンドキャリアのためではなくて、今のために、「現在」のために言ってほしい。カッコいいセリフが出てきても、もちろんそれはかまわない。それも引くくめてスポーツ報道だということです。いろんな意味合いがあり、いろんな力がある。ただ、そこにはアスリート個人の事情だけではなく、僕が話させてもらったように、何かもっと大きな力が、時代だとかそういうものがアスリートの言葉に影響を与えているということはあるだろうと思います。

玉置：そのことについて言えば、「なんも言えねえ」って言ったのは、最初に新聞記者が北島康介を囲んで聞いたとしたら言わなかったんじゃないかという気がしているんです。テレビのカメラがあって、マイクがあって、だからそういう意識をして、言ったんじゃないかな。さっきの一段一段というの、あれはテレビに最初に言っていることなんですね。今の選手は当たり前のようにテレビっ子ですから、活字式で育ったわけじゃないから、やっぱりそこがあるんじゃないかなという気はします。

森田：ご質問の一点目のなかに、テレビ中継の言葉は物語性が希薄という意味のお話があったと思うのですが……。

藤原：玉置先生のおっしゃったような、中継の前後にタレントをスタジオに呼び喋らせるという部分は除外して、試合の中継放送の時には、アナウンサーと解説者の言説はあるけれども、先ほど来、中房先生や玉置先生が触れられたような、誘導できるような言説であったり、メディアリテラシーの対象になるような言説は、中継放送に非常に入りにくいと思います。言説というのは、カメラを置く場所の選び方や、どの試合を放送するかという選択のようなところでも、入ってくるわけですが、それはスポーツニュースや、中継後のスタジオ・インタビューなどと比べると入りにくいと思うのです。またフォトを考えてみると、フォ

トもスポーツメディアではありますけれども、非常に言説の入りにくいものだろうと思います。ですから、言説の入込み方という点に関しては、いわゆるスポーツニュースとスポーツ中継というものを分けて考えてもいいのではないかと、その方が頭の整理がつくのではないかと、という気がします。

森田：中継に言説が入りにくいということはないだろうと思います。だからこそスポーツ中継は怖いんです。中立で無害のように思えるけれど、実はそこにいろんなものが詰まっていることがある。

たとえば2010年のワールドカップ南アフリカ大会で、日本のグループリーグの対戦相手はカメルーン、オランダ、デンマークでした。対戦相手を紹介するときに、メディアはわかりやすく解説します。たいてい日本、日本人と対比して語られる。

カメルーンはメディアによって「身体能力」が高いチームとして表象されたはずなんです。オランダは「攻撃型」である、われわれとは違って攻撃型であると表象されました。デンマークはわれわれと違って身体が大きい、背が高いというような伝え方をされていた。テレビの実況の中で見どころとして、そういうポイントが取り上げられていたはずなんです。

生中継のときに、話す側の用意する語彙だとかエピソードは、どんなに頑張っても限られてしまう。そうすると、見るべきポイントがわかりやすく入っている言葉が多用されるので、ステレオタイプが入りがちです。

たとえば、カメルーンはアフリカ人だから「身体能力」が高い。その身体能力に日本は「組織」で対抗しなくてはならない、と。そういうステレオタイプです。今の例ははっきり言えば人種差別的な言説なんですけど、そういうものをそれと気づかずに僕らは空気のように吸っている。だから、中継に物語が入らないなんてことはないと思います。逆に、意識的につくられたものより怖い部分

があるとさえ感じます。

松浪：ちょっと時間が押してしまいました。

藤原さんがおっしゃったように言葉の使い方っていうのは大変難しいと思います。スポーツメディアなのかメディアスポーツなのか。一般にスポーツメディアというのはスポーツ情報を報道するものと考えられ易く、メディアスポーツといえればメディアに取り上げられやすいスポーツというふうに考えられると思いますが、現在はっきりとした統一見解はないと思います。そこにスポーツ報道、スポーツ中継、スポーツジャーナリズム、いろいろな言葉が入ってくることが、スポーツ情報をどのように伝えるのかということを考えて上で、物事をわかりにくくしているのかなと思います。そういう意味でいまさらながら言葉の意味の使い分けの重要さというのは痛感しています。

「スポーツメディア史を考える」というテーマでシンポジウムを設定させていただきましたが、一つの大きな見解だとかまとめだとか結論を示すのは難しいことだと思います。ただだからこそ、われわれも一人一人、スポーツとメディアの関係性、そこから「人間って何なのか」「スポーツって何なのか」ということを考え続けていくことが重要なんだと思います。

まとめにはなっていませんが、これでこのシンポジウムを閉じたいと思います。

最後にお三方の先生に大きな拍手をお願いします。

どうもありがとうございました。

注および引用・参考文献

- 1) 2011年11月18日、「渡邊恒雄への告発会見などによりプロ野球界を混乱に陥れた」という理由で、清武氏は、読売巨人軍におけるすべての職を解任された。
- 2) 原辰徳。東海大学政治経済学部経済学科卒業。原監督の父、菅野投手の祖父、原貢は東海大野球部顧問、東海大学系列校野球部顧問。元三池工業高校野球部監督（甲子園初出場初優勝）。元東海大学付属相模高等学校野球部監督、元東海大学野球部監督。
- 3) 2011年10月27日に開催された「2011 プロ野球ドラフト会議 supported by TOSHIBA」。読売巨人軍の単独1位指名が確実視されていた東海大学の菅野智之投手だったが、巨人と日本ハムによって指名が競合。結果、日本ハムが交渉権を獲得した。菅野投手は11月21日、日本ハムへの入団を拒否し、一年間浪人することを表明した。
- 4) 2014年FIFAワールドカップ アジア3次予選 第4戦 日本対タジキスタン。
- 5) 第11回女子バレーボールワールドカップ 日本対セルビア。
- 6) 『甲子園球場物語』、文春新書、2004年。
- 7) 『スポーツニュースは怖い』、生活人新書、2007年。
- 8) 『メディアスポーツ解体』、NHKブックス、2009年。
- 9) 中房敏朗（1995）「イギリスの活字メディアとスポーツの関係史」、中村敏雄編『スポーツ・メディアの見方、考え方』創文企画、中房敏朗（2010）「欧米におけるスポーツ新聞（雑誌）の過去・現在・未来」『現代スポーツ評論』第22号、創文企画。
- 10) D.Beck and L.Bosshart(2003), "Sports and Media", *Communication Research Trends[Centre for the Study of Communication and Culture]*, vol.22, no.4, pp.1-27
- 11) *Spectator* (1711) ,vol.2,pp.302-303

- 12) D.Beck and L.Bosshart (2003),*op.cit.*,p.6
- 13) M.Williams ed. (1985),*Double Century:200 Years of Cricket in The Times*,Willow Books: London,p.2
- 14) D.Beck and L.Bosshart(2003),*op.cit.*,p.6
- 15) *ibid.*,p.6
- 16) *ibid.*,p.6
- 17) *ibid.*,p.7
- 18) 中房 (2010)、前掲論文、p.125を参照。
- 19) 現在はイギリスでも『デイリー・スポーツ』(1991年創刊)や『サンデー・スポーツ』(1986年創刊)のように、女性のヌードを紙面の1面に堂々と載せるスポーツ新聞もある。
- 20) 小田切毅一 (1995)「アメリカにおけるスポーツ・メディア (マガジン) の歴史」、中村敏雄編『スポーツ・メディアの見方・考え方』創文企画、p.179。
- 21) シンポジウムでは、イギリス、アメリカ、フランスなどにおける19世紀以前に創刊された定期行物、20世紀以降に創刊された定期行物などの一覧表が配布されたが、紙面の都合で割愛した。同様の一覧表は、中房敏朗 (2010)「欧米におけるスポーツ新聞 (雑誌) の過去・現在・未来」『現代スポーツ評論』第22号にも掲載されているので参照されたい。
- 22) Matthew A.Masucci, *Sport and the Mass Media: Impact and Issues*
<http://www.sjsu.edu/faculty/masucci/SportMassMedia251.pdf>
- 23) 中房 (1995)、前掲論文、p.229以下を参照。
- 24) “*The Field*” 紙上で展開された統一ルール形成過程については、つぎを参照。中房敏朗 (2000)「サッカーはなぜボールを手で扱ってはいけないのか」、『現代スポーツ評論』創文企画、第3号。
- 25) 中房敏朗「公私の社会編成と近代スポーツの形成」、第18回宮城体育学会 (仙台大学)、2009年11月。
- 26) A.クーン/A.ウォルフ編、上野千鶴子他訳 (1984)『マルクス主義フェミニズムの挑戦』勁草書房、上野千鶴子 (1985)『資本制と家事労働』鳴海社、上野千鶴子 (1990)『家父長制と資本制』岩波書店、上野千鶴子 (2003)「市民権とジェンダー：公私の領域の解体と再編」『思想』955、梅沢直樹 (1996)「資本制社会と女性労働差別」『社会・経済システム』15などを参照。
- 27) ハンナ・アレント、志水速雄訳 (1997)『人間の条件』筑摩書房。
- 28) 明治14年5月14日付で、9日に行なわれた天覧相撲の模様を1段25字×83行に纏めた。
- 29) 『横浜毎日新聞』5月30日紙面。
- 30) 明治29年7月20日「松蘿玉液」の一節。署名は本名の「升 (のぼる)」。
- 31) 『日本新聞販売史』(日本新聞販売協会編、昭和44年)によると、明治27年の『日本』は6403部。
- 32) 8月29日から『東京朝日』が「野球と其害毒」のタイトルで反野球キャンペーン連載を開始、9月1日からライバル紙の『東京日日』が「野球と学生」を掲載し、『読売』などの在京各紙も連載やコラムなどで取り上げたうえ、講演会も開かれ、約1ヶ月に亘って論争が展開された。
- 33) 明治初年の鬼面山一両国戦は両力士が「待った」を計百回以上連発し、約2時間以上にらみ合いを続けた結果、日没となり、両力士とも歯から出血したため、傷み分けとなった故事がある。
- 34) 幕内10分、十両7分、幕下5分と決められたが、その後、改正され、現在では、各4分、3分、2分になっている。
- 35) 昭和23年に『デイリースポーツ』、同24年『スポーツニッポン』と『報知』、同30年『サンケイスポーツ』が創刊された。
- 36) 2008年北京五輪100メートル平泳ぎで金メダルを獲得した直後のテレビインタビューのことば。

- 37) ロバート・ホワイトティング：『菊とバット』、サイマル出版会、1977年。『菊とバット完全版』、早川書房、2005年。
- 38) ロバート・ホワイトティング：『和をもって日本となす』、角川書店、1990年。
- 39) サイモン・クーパー：『サッカーの敵』、白水社、2001年。
- 40) サイモン・クーパー、ステファン・シマンスキー（森田浩之訳）：『「ジャパン」はなぜ負けるのか——経済学が解明するサッカーの不条理』、NHK出版、2010年。
- 41) 鮫島彩。フランス、モンペリエHSC（女子）所属（当時）。なでしこジャパンのサイドバック。元東京電力女子サッカー部マリーゼ所属。マリーゼ所属中は、東京電力福島第一原子力発電所で事務員として勤務しながら練習や試合に臨んだ。
- 42) 岩清水梓。日テレ・ベレーザ所属。なでしこジャパンのディフェンダー。岩手県岩手郡滝沢村出身。滝沢村には祖父母が住んでいる。
<http://www.vill.takizawa.iwate.jp/azusa>